

のみならず支那ばかりではない。東アジアの他の諸國も帝國に敬して服するやうになるのだ。」とある。茲で腹藏なく申せば、そういう表現は、英米人をして少くとも日本はシャムあたりまで日本に従屬させようとするのだらう。と、かういふ風に解釋せしむることになると思ふ。此頃は大アジア主義、或は大アジア聯盟といふやうな言葉が大流行で、過日もその方に關係のある人が來たから、私はかかつてやつた。「大の字だけ餘計だ」と。「どういふわけですか」ときかれたから「大の字がつくと印度は固よりトルコあたりまで入るだらう。然るにトルコはソ聯邦の同盟國だ。日本の大使連中がコンスタンチノブルでお互の顔合せをやらうとした所が、トルコ政府から抗議して來た。おれの方の領域内に於て外交策動をされては困ると、さう云ふ次第で、とてもあの邊まで手が届かぬ。大の字は抜いてせめてシンガポール邊までにしる」(笑聲) そう言つてやつたことです。

兎も角東亞新秩序再建は當然に國民政府の潰滅を必要とする。即ちチエムバレン首相が千九百三十六年十月、ロンドンのシチーで行つた演説の趣旨を打壞すことである。その趣旨とはかうなんです。曰く「支那が幾多の難關を啓いて現代式國家として更生しつゝあることは英國の非常に喜びとする所である。この偉業が日本と支那のゴタゴタの爲に阻碍されるといふことは、英國として無頓着であり得ない。」と。先年來國際聯盟から色々の専門家を派遣し、所謂支那の建設的事業に技術上の援助を與へたりしたのも、つまり皆チエムバレン氏の所謂現代式國家としての更生支那を育成するといふ英國の方寸から出て居るのです。かるが故に國民政府潰滅を必須的前提とする東亞新秩序の建設は英國の極東政策とは氷炭相容れざるものであります。更にもう一つ最近の英國の議會に頻々と繰返へさるる質問應答を見ると「ドイツがチエツクを一晚で併呑し、メーメルに進む。イタリ

一がアルバニアに軍を進入させる。所謂實力外交で獨伊はぐんぐんやつて居る。なぜ政府はもつとソ聯邦と接近して以て獨伊を抑へるの途に出ないのか」との論難は毎々繰返される。これに對して最近チエムバレン首相は、「ソ聯邦と相談して居ないのではない。ハリファックス外相は、ソ聯邦側と絶えず意見を交換して居るのだ」と答へて居る。斯の如く英國がソ聯邦と相談してやつて居ることは、慎重なるチエ首相が公然議會で言明して居る。此頃「日本は全體主義の國家ではないのだから、それをはつきりさしてアメリカあたりの誤解を解かんとしけなす。」そんなことを言つて居る連中があるようですが、全體主義のとか、デモクラシーとかいふのは印絆纏ですよ。日本が全體主義でない位はアメリカ人は知つて居る。全體主義でないと言つて見た所で、日本が支那事變を續けて居る限り斷じて英米は好い顔は見せない。全體主義はおろか、ソビエットのやうなコムミュニズ

トでも、英國が採つて以て利用するの價値又は必要ありと見れば、あの通り大さわぎをして居る。議會の論壇で全體主義だとかが問題になるといふのは、實に日本の政論もこの頃は頗る低調だと言はなければならん(笑聲)。もう少し眞面目に物事を考へないといけなす。其の場の思ひつきであんなことを輕々しく言つては、益々英米に馬鹿にされるばかりです。

そこでイーデンが曰く「イデオロギイは問題ではない。その國の對外行動如何が問題なんだ。だから自分はソビエットのイデオロギイには賛成せんが、そんなことはどうでも宜い。世界のどの局面に於ても、ソビエトは吾々の側に立つ。どうしても英國はソビエトと一緒にやるんだ。」と、イーデンのやうな青年政客でも、これ位のことは知つて居る。

ソビエトと英佛とを引離して日本が旨いことをする。國際の現

實はさうは出来て居らん。遺憾ながらそれは不可能です。

D 三國同盟化の議論

もう一つ、それでは中立といふのはどうだといふに、總てが白紙の状態ならばそれも妙だらう。白紙とは防共協定がないと云ふ意味だけではありません。支那事變に關して所謂民主主義列強が日本に突掛つて居る、援蔣政策を執つて何日迄も抗日をやらせて居る、あれがなければ、といふ意味なのです。今日全然お互に白紙の状態であるならば、ヨーロッパで英佛と獨伊がやり合はうが、何だらうが、それこそどうでも宜しい。どつちかが加勢して下さいと言へば、條件次第の話。併し今は白紙状態ではないのです。こつちはちやんと防共といふ法被を着て居る。相手からは便宜上トータルリアン組の方に算入されて居る。今イギリスあ

たりの考では、どうにも、かうにも獨伊は何時又どえらいことをやるかも知れない。其の場合、英佛の武力では足りんから、どうしても外交工作に依つてドイツ包圍網を作る外に仕様がなない。その見地から言へば、どうしたつてヨーロッパに於てはソビエツトといふものを利用しなければならん。英人は自惚れが強いが、同時に徹底的の功利主義ですから、今日の場合ソビエツト利用策、即ち英ソ提携策には頗る眞劔なんです。日本としてはその點を考へなければならん。そこで今日本は——どちらから働きかけたが知らんが——外國電報を見ても、少くとも防共協定の強化といふか、三國を盟邦化せうといふことが、廟議の問題となつて居ることだけは疑がないようである。

(1) 三國關係條約化の原則

そこで、今吾々が政府者の地位にあつてこれに對する處理が出来るといふ假定の下に、どうすれば宜いか。私は日本の一部に、ドイツと親類附合になるといふことを感情的に好まぬ分子のあることを能く知つて居る。吾々としても又別にドイツに惚れてどうかうといふのではない。私はかういふのはどうかと思ふ。それは防共三國は現下の國際情勢に鑑み、世界の安定に寄與するの企望に動かされ、三國相互の關係を左の原則の上に規律することとする。即ち(一)三國は共通の政策及相互の間に承認し劃定さるべき特殊利益に關し常に隔意なき協調を保つべし。(二)右共通政策又は利益が何等かの事情により侵迫せられ、又その危険ある場合には三國は之が擁護の方法手段に關し遲滞なく協議すべし。(三)三國は右の「政策」及「利益」に關し互に支持を與ふべきものとす。大體斯う云ふ原則を條約化することとする。

(□) 條約化せざる遣り方

軍事協定とか云ふ議論は昨今大分聽えてゐますが、けれども、それは前述第二點に關聯し、締盟三國の軍事當局間に別に相談をさせることとすれば可いのである。御互に相手方の注文にその儘に聽從する譯にはゆくまいと同時に、實力の伴はない、肚の入らないアレンジメントは何にもならないのであつて、或る一定の場合實力で或る種の結果を與へるといふ含蓄があつて、茲に初めて三國の結盟が相手方に對し威力を感ぜしめることになる。去りながら、そこには又國民の思惑などもありますから、局に當る政治家として之が處理には、周到なる用意と賢明なる遣口を要する事情のあるべきことも亦理解してやらねばならぬ。國內の政治的事情に於て政府として一舉に事を進め得ない境地にありと云ふならば、そこに

は又自ら一つの遣り方もある。名を去り實を採るといつたふうなやり方もあります。

御承知の如く歐洲大戰に於ては英佛は安危興亡を共にして戦つたのであります。が、英佛兩國の間は所謂軍事同盟は勿論嚴格に云へば軍事協定すらなかつたので、唯戦前數年來兩國軍事當局の間に或る假定の下に、一種の研究をして共同作戦の實施方に付斷續的に意見の交換が行はれて居つた。情報の交換も勿論行はれて居つた。かうした不斷の接觸、意見の交換が開戦の曉に兩國の共同作戦の上で結實したままであります。兩國軍憲間のかうした接觸保持については、何等兩政府間に拘束力ある協定があつた譯でなく、關係文書としては、僅にグレイ英外相とカムボン佛大使との間に一九一二年中私信體の往復書翰あるのみであります。その書翰の趣旨は「數年來英佛海軍當局の間に、或る假定の場合に於ける共同動

作について互に意見の交換、研究をやつて居るは御承知の通りだが、之は洵に結構なことと思ふから今後もその儘續けたいと思ふか如何か」といつたような意味です。要するに兩國間の條約でも、協定でもないから、義務は生じないが、一朝有事の場合にはあの通りの効果を生じて居る。私は英佛間の此の例などは此の場合大に參考となるべきものと考へるのです。

日獨伊三國は現在の國際政局に於て少くとも防共といふ一つの共通政策を有つて居る。そして又齊しく所謂現状維持國と對立して、向ふ側の政策の對象とされて居ることも亦争ひなき現實である以上、此の共通の政策及利害關係擁護のため、の隔意なき不斷の接觸と相互支援の協商が三國間に訂立されるのは當然の歸趨である。そこまでは國內の大多數が異存ない、否寧ろ希望するところである。唯一步を進めて之を所謂軍事同盟とするといふ段になると、そこに難關ありとすれ

ば、其の難關排除は、今擧げた英佛間往年の例のように條約にも協定にも載せず、事實に於て三國軍憲間に不斷の接觸保持、そして種々の假定の下に意見、研究の交換といふことにするが可いと考へるのです。さうすれば、獨伊との同盟を好まぬ人に對しては、いや、同盟ではないのだと云へる。事實又同盟ではないのです。法律的に云つてそうではないのだ。さういふやり方もあります。

(ハ) 注目される英米海軍の共同動作

現に、英米間には、日本を對象とし、目標とする海軍共同動作の協定が出来て居るように認められますが、それは大戰前の英佛海軍間のそれと同じで、英米兩國の海軍當局が或る假定の下に太平洋に於ける共同作戰の研究、意見の交換を行ふといふ建前になつて居るのです。こゝにそれを文獻によつてお話しする。先づ

千九百三十八年三月のザ・ラウンド・テーブル誌です。所謂ラウンド・テーブルグループの英國政論界に於ける地位については、今更御説明申上げるまでもありません。最近このグループの大御所であるロシアン侯 (Varguis of Lothian) が、駐米大使に任命されてゐる。さて今云つたラウンド・テーブル三十八年三月號の華府特信に次のような記事があるのです。即ちロンドン海軍會議から日本が脱退し、英米佛三國で新しい所謂倫敦海軍條約が出来たあの一九三七年の暮から新年にかけて、米國軍令部の作戰課長キャブテン・インガソンといふ先生がロンドンに往つた。これは秘密にされる筈になつて居つたが、偶然のことから世上に漏れた。そこで官憲側からは、「インガソン大佐の英國出張は、(1)英國が新建艦をやつて居るが、何か技術上の新工夫がありはしないか、(2)日本が四萬六千噸級の戰艦を造つて居るといふ噂だが、英國はそれについて何かしつかりした情報を持つ

て居るか。此の二點を英國側に衝きとめるためだ」といふ風に言ひ觸らされたのであるが、實はそれよりも、もつと重要な使命を帯びての出張だつたのだ。それは「極東に於ける海軍共同動作に關する打合せである。その共同動作とは日本の長距離封鎖をやるといふことなんだ」とあります。又昨年エール大學出版部から出た *And so on to War* と題する書物にはもつと詳しい記述があります。即ち同書によれば、

「この問題については今年の春米國議會の委員會で質問があつた。『英米間に海軍に關する秘密協定が出来たといふ話ではないか。』といふ質問に對して軍令部長アドミラル・リイは「それは秘密會以外では答辯が出来ない」と答へて居る。ないと言つて居ない。そこで今度は國務卿ハル氏に訊いて見ると、そんなものはないといふ返事であつた。(それはないと言へるのです。條約ではないのだから…)

…)

ハル氏はさういふ協定はないと言つて居るけれども、米國は英國と提携して極東問題に臨んで居るのだといふ意味のことは、はつきり言明して居る。それはどういふふうかと言へば「同盟、或は込入つたる國際協定はこれを避くると同時に、若しもアメリカが或る一國又は數國と利害關係を共にし目的を同じうする場合には、我が政府は、さうした政府と情報を交換し、進んで並行線に沿うて同種の措置を採る」と云つて居る。之は極東問題では、アメリカは英國と共に行動するのだとの言明であり、現に其の通り行動して居る。

已に極東問題で英國とさういふ關係になつてゐる結果として、その爲めに武力の發動を見るべき場合についての協定も出来て居るのだ。その内容は日本に對する共同作戦で、共同作戦の行動範圍はシンガポールあたりまでも及んで居

る。それから、この協定の形式は往年の英佛協定の如く、所謂條約ではないから法律上の義務を負はないのだ。また、一九三七年十月三日のニューヨークサンデー・ニュースに、長距離封鎖といふ大々的な見出で、二頁大の太平洋の地圖が出て居る。それに何が書いてある。かといふと、點線でアラスカの南端からハワイの西、ニューギニアの北、ボルネオの南を通過してシンガポールに至る線が書いてある。さうしてその線を二つに分つて、一つを英國艦隊封鎖線、もう一つを米國艦隊封鎖線としてある。それからシベリヤからフィリピンに至る縦の線を引いて、これに日本艦隊が本國根據地から攻勢的に行動し得る地理的限界と記してある。この地圖の出所は何處であらうかと想像するに、ルーズベルト大統領が退屈の時には始終何かしら地圖を引いて居ることは、ホワイトハウスに出入りの人達が皆知つて居る。

この地圖は十月三日のサンデー・ニュースに出たのだが、恰度その二週間前にサンデー・ニュースの社主がホワイトハウスを訪ねて居る。その時にルーズベルト氏が書いて居つた地圖を見て、「面白いものだが、出してもいいか、いいかも知れん、そんなやうなことであつたらう云々」

とあります。兎に角英米に於ける權威ある雑誌、著書等に徴するも英米間はさう云ふ特殊緊密な關係になつて居る。私は千九百三十三年か四年かに大阪で或る機會にした演説中「ニューデールが愈々失敗と決りさうな時には、ルーズベルト氏は非常な人心轉換策をやるだらう。非常に雄大な武力を以て日本を威嚇しつけるだらう。さういふ風に来ると見なければならぬ。」と申したのですが、エール大學出版部から出た右の書物にも、ルーズベルト氏の今採つて居る政策は米國をして歐洲の戦渦に投入させる虞れがある。ウイルソンは氏二年かゝつて、英國に

操やつられて到頭參戰したが、ルーズヴェルト氏は二ヶ月で飛込んでしまふだらう。又、極東では日本を武力で叩かないまでも武力で威嚇しつけて日本を參らせやうとする方針を採つて居るとして、三十幾つかの事例を承けて居ります。その中にはパネー號事件に關し、ル長官の齋藤大使引見以前同長官に與へた内訓なども出て居る。それは皆様御承知の通り其内容實に我々日本國民として

のものです。さういふ譯ですから、日米親善なんていふことは昔の夢である。滿洲まで棄てるのでなければ、ルーズベルトさんが吾々の可愛い兒とは決して言つて呉れません。それだけは確かです。

(二) 英國事變結末を見終る

もう一つは近頃世上で色々な流言蜚語が行はれますが、その一つに米國から大

きな借款が出来さうだとか、否已に其話が整つたとかといふ噂がある。日本の一部は今金なし病に取憑かれて居ると見えて、何でもいゝから、何處からか少し金が入つて来ないものかしら、といったやうな空想に浮かされて居るようだが、困つたものであります。私は事變勃發の其の瞬間に、今度は全面的日支戦争だど當路者にも國民にも警告したのであります。政府は勿論、多くの人はやれ不擴大主義だ、現地解決だと言つて私の言に耳を傾けなかつた。然るに夫のラウンド・テーブル誌の一九三七年 却ち一昨年九月號にある論文に何と言つて居るか？ この論文は八月に執筆したのだと斷つてありますが、ちゃんと全面的日支戦争だと思透しての議論です。しかも戦局の歸趨についても頗るシツカリした所論です。即ち同誌曰く、

(1) 精銳を誇る蔣介石の中央軍も、將又七百機を算する空軍も到底日本の

敵ぢやない。本格的の戦闘——レギュラー・バトル——では支那は見込みがなす。

(2) そこで懸てゲリラワーとなるだらう。ゲリラ戦となれば、支那兵は過去十年グリラ戦の體驗を持つて居る。と同時に支那の地形はゲリラ戦に最も適當して居る。だからゲリラ戦になれば、日本軍の優越性は段々減殺され、そして戦は長期戦化する。

(3) 長期戦となると日本側に於てファイナンシャルコロプス——經濟的崩壊——さうして同時に社會的

と、斯う云ふて居る。彼等に云はすれば今丁度此の第三段階になりかゝつて居ると、かう云ふのでせう。この際何とか英國に向つて講和を斡旋して呉れんかなどと頼んで見ても、問題にならない。政府は言はぬ。軍部も勿論言はない、けれ

ども他の方面即ち相當の連中が、個人として相當なイギリス人にさうした弱音を吐いて居るらしく思はれる節がある。甚しきは防共協定なんて變なものを作つたものだと、英人に向つて懺悔して居る人もあるらしい。以ての外である。「さあ愈々日本は悲鳴を擧げて來たぞ、もう一息だぞ、もつとやれ」といふことになることはわかり切つて居る。だからイギリスの斡旋に依つて和局を招來しようなんといふことは、この戦を無限に擴大し、無限に延長して遂に我れをザエリヤに於ける獨逸の貳の舞をさせる所以である。日本を敗戦させたいのならイギリスの好意とかに依頼するに限る。さうでなかつたら以ての外である。

話を元に戻して、ラウンド・テーブル誌曰くの續きですが、長期戦、日本の經濟的崩壊、社會的不安の増大、そこで

(4) ソビエットの武力干渉、それから

(5) 列強の調停で戦争がお終ひだ、とある。

ちやんと英國側のプログラムが早くも一昨年八月却ち事變勃發の殆んどその瞬間に英國外政に指導的權威を有する有力グループの機關誌に掲げられ、爾來それが英國の外交活動に着々表現されて居ること、御承知の通りである。「どつちにしても英國は有らゆる機會に苟も調停をする、即ち干渉をするチャンスがあれば、斷じて見逃してはならない。英國の手でこの事件を纏めなければいかん、さうして問題の鍵はソビエト・ロシアが握つて居るのだ」と、かう附言されてある。斯の如く英國政府の鼓吹者、指導者の地位にある政治勢力は、日支事變のそも／＼初發から、已にソビエトといふものをちやんと最後の切札として取つてある。「ソビエトは敵とするが、英國とは然りを戻して仲良くしたいのだ」と日本が言へば、英國の連中は「日本なんか實に幼稚なもんだ」と、その與し易きを笑

ふだらう、否な已に笑つて居るでせう。

(ホ) 米國の對日態度

金の話になりますが、米國が日本に金を貸すなどといふ事は如何なる形式によつても絶対にあり得ない。それは夙に國策で決つて居るのです。米國との關係になると、動もすれば經濟封鎖云々の話が出るが、一體なぜそんなに經濟封鎖といふものを怖がるのか私には理解出来ない。事實もう或程度の經濟封鎖を食つて居るのです。先方でなし得る限度の經濟封鎖は已に之を食はされて居るのです。現に昨年以來のことを擧げて米國々務長官は對日輸出業者に對し「日本は益々爲替管理を強化して居るから、日本への輸出商談は現金又は國際的通用力ある信用狀と引換でなければ整へてはいかんぞ、その注意をしなくて取引した結果代金不

拂に遭つても、大使館や領事館から救済處置を受けることは出来ないぞ。」と、かういふ注意を與へたことが一つ。もう一つは昨年秋でしたか、國務卿の内訓といふ形式で、日本に對する一切の飛行機及び部分品の輸出を差止めた。其他政府の力で及ばぬことは労働組合が如才なくやつて居る。日本向きの屑鐵搭載の船に對しては、仲仕人足を煽動して荷役の邪魔をする如き其の一例であります。英國も相當經濟的壓迫を加へて居ります。

それ以上のことは武力に惹ふるの覺悟なくは先づ行はれ難いのです。それと同時に經濟封鎖を怖がつて居るのは日本ばかりではない。アメリカ自身も亦日本からの經濟封鎖を眞面目に怖れて居るのです。それはどう云ふ事情からであるかと申すと、米國は其の所要の錫とゴムの殆ど全部を蘭領印度、ボルネオ等即ち所謂南洋方面からの輸入に仰いで居る。従つてその輸送路は全然日本海軍の制壓下に

ある。これを停められたら、米國の積貯兩方面の産業はピタツと停つてしまふ。かういふわけです。經濟封鎖で弱はらせられるのは日本ばかりではない。双方とも之を怖れる弱點がある。結局經濟封鎖といふやうなことは開戦の覺悟がなくつては行られないだらうと考へるが常識である。

(八) 經濟封鎖恐るゝに足らず

従つて「獨伊との關係を強化すれば、英米、就中米國から經濟封鎖がくる」などと言ふのは、それは議論ではない。恐怖症から出た臆言である。何んぞ況んや今の日本は餘り樂をして居るから、稀には經濟封鎖といふもの位を食つて見た方がいゝかも知れない。活動寫眞館の前は長蛇の列を成し、待合の前に自動車の横列が蜿蜒としてゐる。それで東亞の新秩序建設が出来たのでは、世界戦争の當

時に英佛獨等主要交戰國民のあの努力、復興獨伊のあの血涙の奮闘を何んと見るか。經濟制裁位佈しいようではどうするのだと言ひ度いが、實は先方に力が具はつて居ないから、そこまでは恐らく來ないだらうと思ふ。この問題は先づこの邊の所にして置きます。

事變處理策に就て

A 外交工作の效果如何

次に、當面の支那事變に對し外交上効果的の方策如何と云ふ點ですが、所謂講和工作について坊間色々の風聞は、私もこれを耳にして居ります。皆様は私以上に能く知つておいでせう。かういふ大規模な——且つ年を重ねての所謂長期戰

になると、政府の立場、當局の立場としては、何とか早くこれを片付けるワインド・アップする方法はないものかと苦心するのは寧ろ自然の數で、一概に之を非難する譯には參りませぬ。問題はそうした工作を試みるのが善いとか、悪いとか、意氣地があるとか、ないとか言ふ點ではありませぬ。果して効果があるか、否かの點なのです。

(イ) 世界大戰當時の先例

世界戰爭の時にも、裏面で有らゆる平和工作の行はれたことは私はあちらに居つて詳しく見て居つた。勿論新聞雜誌などには其の當時は決して出ませんよ！一九一六年になると、英佛は講和促進に随分うき身をやつした。

スイスがその舞臺で、イギリスからは有名なスマッツ將軍が往つたこともあ

る。フランスからはブリアンが行つたとの噂さへあつた。ドイツの方でも相當の人物を寄越した。所が、かうした講和の内談は、當事者双方顔合せをして話して見ると、妙なもので、お互の見込が非常に違ふ。例へばドイツの方では自分は戦勝者のつもりだから、ベルギーのフランドル地方だけは何とか特殊の方式のもとに獨逸との因縁を着けて置きたいと云ふ。ドイツではこれは非常な讓歩の積りです。所が聯合國の側では、戦争は長引けば結局自分共の勝ちになると云ふ頭だから是亦戦勝者氣取りでせめてメツツ、ストラスブルグ位は返して貰はなければ問題にならない、と來る。ドイツの方では、冗談ぢやない、パリーの手前二十何哩の處まで俺の方が占領して居るんぢやないか、と云ふ吐です。

斯う云ふ風に當事者が顔合せをして見ると、お互ひに自分の方の弱點は打ち忘れ、相手の弱點だけを發見したやうな氣持になる。「あいつ大分弱つて居るから、

もう一押しだ。」トゥ〜「もう一息だ」「もう一息だ」で四年三ヶ月の長期戦になつた。結局何に依つて和局が招來されたかと言へば、聯合國側の獨逸に對する海上封鎖がうんと嚴重に、所謂水も漏らさぬ程度に強化されたこと、米國參戰の効果が漸次現れて來て、何十箇師團の米軍が戰場に現れて來たこと、それからイギリスの發明に係るタンクが、ぐんぐん效果的に改善改作され、且つ非常な澤山の數で戰場に活躍し出したこと、之を要するにやはり正直に戦争の方に勉強したから、聯合側が勝つたのである。

裏面の謀略や側面的工作で戦争の目的を達しようとすることは、歐洲戦争に於ける此の經驗で見まして、却つて逆効果を現はすだけだといふことを信じて疑ひませぬ。況んや謀略となると、支那人の方が先天的に上手なのです。お互日本位本人が一番下手だ。その代り正義の立場に立つて實力で直往すれば、向ふは謀略

でフラー／＼なのだから、結局之を突破してしまふ。日本人が謀略で支那人をやつつけようなどといふのは、少し見當違ひだと思ふ。此席に見えてる松井大將などは、私共お互に随分支那では苦勞をさせたからどうか知らんけれども、謀略は一體正直な日本人の長所ではない。我れの短を以て彼れの長を伐つ、我れ其の可なるを見ずで、これはいけない。どうしても眞直ぐに、神速果敢に所謂國民政府打壞の軍事行動に専念する以外に、此際打つべき效果的の手はありません。

(口) 日露戦役の先例

「そんな事を言ふが、こちらに相當の條件で講和の意思があるのなら、支那の方だつて随分和平の意思は動いて居るのだし、汪兆銘の聲明が大分効果を擧げて居るやのこの際、日本は講和の意思は勿論のこと、講和條件まではつきり示したら

可からう。かういふ意見もあります。併しそれは私に言はせれば非常な間違である。私が言ふのではない。日露戦争當時の小村侯爵がさう仰言つて居られる。御承知の通り奉天戦が済むと見玉參謀長が秘密に歸京されて、桂首相に向つて「何時まで戦をするんだ。もう陸軍は之以上はやれぬぞ。」と強硬に詰寄られたのです。政府は實は小村外相の手で米國大統領ルーズベルト利用の講和工作は相當やつて居たのだ。ルーズベルト氏も頻りに講和斡旋の機會を狙つて居りましたが、恰度見玉さんの上京の頃、金子男（今の堅太郎伯）と高平公使を招き「此頃どうもロシアの連中は講和を欲して居るようだが、ロシアから講和を申出れば屈辱的な條件を日本から持出されはしないかといふことを憚つて居るらしいから、日本は此の際一つ相手のため抜道を拵へてやつたらどうかやらうか、それには先づ日本が講和に應ずる用意あること、それから出来れば講和條件の大意はこんなもの

だといふ所も示してやつたらどんなものだらう、ほんの思ひ付きだが、日本政府で考へて貰ひたい。」と云つた。之と前後し、英國の駐日マクドナルド公使も本國外務大臣の内訓によつて小林外相を來訪し、「どうも英國政府の情報に依ると、ロシアの政府部内には大分講和の意思が動いて居るらしい」と言つて、ルーズヴェルト氏と同様の示唆を持ち込んで來た。勿論英國側とルーズヴェルトとの間に打合せた結果であることは明白だが、時に小村外相は何と答へられたかと申すに、英米の勸告に對し好意を謝すると共に、

「一體ロシアの政府部内に講和の意思動きつゝありと云はれるが、御承知の通りロシアの政府部内には二つの派がある。武斷派と文治派とある。そしてこの戦争を主としてやつて居るのは武斷派だ。講和論の擡頭と言ふが、それが文治派の方のことならば此の場合何等の價値もない。彼等は初から戦争反對なん

だ。武斷派が講和を希望すると言ふのならば茲に初めて問題となるのだ。然るに本大臣の見る所では、武斷派の連中も、もう實は戦勝の見込みがないことはわかつて居るだらうけれども、彼等の口から戦争打切、講和必要と言へば、それで忽ち彼等自身の立場が崩れてしまふ（今の支那の内情が恰度それですよ）。これを要するに、講和問題は露國に於ては内部の政争の題目になつて居るのだ（丁度今の支那の通りです）。だからあなたの言ふ通りに日本から講和條件は固よりのこと、講和の意思があるといふだけのことでも漏示しようものなら彼等の内争の題目に利用されるばかりで何ら戦争の終局を促進する所以ではないばかりか、「それ日本の弱點が暴露されたぞ」とばかりで却つて主戦派の意氣込を強化し戦争を長期化するであらう。若し夫れ講和條件なるものは戦局の進行如何に依る。講和條件がこれ／＼だと今からハッキリ言へるものではない。」

と、斯う小村侯は答へられたのであります。

B 講和工作よりも武力運用

私は小村侯の此の言葉を

の外交關係の人々（獨り外務大臣のみでな

し）に考へて貰ひのです。汪兆銘の通電に依れば、昨年一月の日本の廟議決定、
確乎不動といふ講和條件には、賠償金もあり、駐兵區域も相當大きかつたが、今
度の近衛聲明では賠償金も要らんとし、駐兵區域もうんと小さくなつて居る。
大分日本も反省して來たやうであるから、この際宜しく和議を講ずべしと言つて
居る。吾々はこの際須らく、あの偉大なる先人小村侯の與へられた教訓に稽へな
ければならぬと思ひます。此際日本として下手間誤つけば戦局を更に無限に擴
大、長期化するの逆効果となり、大國日本の進運も不幸にしてこゝで一度は

なきを保し難し。唯だ、祖宗神靈の御加護の下に幸に大過なく難局
を切抜け得ることを偏へに念じ奉る次第である。去り乍ら盡すべきを盡さず、偷
安姑息難きを捨て、易きに就くは神明の加護を祈願する所以の道ではない。所謂

と信じて疑はないものであります。

帝國は惠念一意武力の運用
によりて敵の抵抗意思を叩き潰す。即ち所謂國民政府潰滅に直往進するの一途
あるのみ。歐洲戰の教訓は素よりのこと、日露戰爭に於けるルーズヴェルト利用
の講和工作も、奉天の大勝だけでは足らず、日本海々戰の全勝があつて茲に始め
て結實の効を擧げたのであることは、御承知の通りであります。

(イ) 「戦争」といふ一大事實

然らば武力による敵潰滅戦に直往するとして、此際帝國は何等自ら反省再考慮する所なくして可なる歟と申すと、愚見によるに大に之れあり、帝國は「國として自ら忘却して居る一大事實がある、宜しく其事實に眼醒めよ」と私は大聲疾呼し度いのであります。一大事實とは何ぞや、帝國は現に一大戦争をして居るといふ此の事實なんです。帝國は現に我國未曾有どころでない、世界の歴史に於ても夫の世界大戦に次での一大戦争をやつて居るのである。之は何人の目にも蔽ひ切れない一大事實である。國內的には所謂戦時體制の下に國民生活のあらゆる部面が置かれ、

て居る。然るに對外關係に於ては之を戦争でない、事變だといふ建前で今日

までやつて來てゐる。

改めて説明するまでもなく、戦争と云はず事變と云ふことにしたのは、畢竟事件が短時日の内に片付く、例へば往年の義和團事變のやうに先づ數ヶ月で終了するといふ見込みから出發して居るので、即ち事變當初に政府の公式に用ひた現地解決、事變不擴大、北支事變等々の標語に現はれて居る思想が、戦ひが全面的となり、今日のやうな大戦争となつてしまつても、まだ其儘に軍國政府の頭を支配して居るのである。勿論戦局が全面化した後と雖も我が連戦連勝の赫々たる戦果に鑑み、相當の期間内に敵の屈伏講和か又は所謂國民黨政權の没落を見るだらうと、常識上推想し得られる限りは、事變としての取扱を其儘に續けて居つても、必ずしも不都合とは申し難く、それに實は戦争だと云ふ建前を我より取れば、米國中立法が當然に發動され、其の結果、軍需資材等の輸入に不便窮屈を感じるやうな

ことになるだらうといふ當然の懸念が、政府の方針の上に少からざる勢力を及ぼして居たことであらうとも思惟されるのでありますが、今日の現状は最早や今のまゝで往くを許さなうと思ふ。言換ふれば、我が政府をして本戦役を單なる事變として扱はしめた事情の殆んど全部は今や變更して居る。否、解消して居るのであります。即ち、(1)今や我方の好むと好まざるとに拘はらず、事態は全く長期戦化して居ること、(2)所謂平和工作の到底徒勞たるのみならず、却つて敵及其の背後の支柱たる第三國(複數)をして誤認せしめ、益々長期抵抗の決意を強靱化せしめつゝあること、(3)英米佛等の蔣政権援助が近來頓に露骨に且つ大規模化しつゝあるの現實、そして(4)所謂長期戦は徹頭徹尾帝國の不利たるの理數に鑑みますると、此の上依然として事變取扱を繼續するは所謂漫然惰性的行懸りに膠着するものであつて、全然無意味であるのみならず、斷じて我が戦果を全ふして

最後の目的を達成する所以の道にあらずと信するのであります。

(口) 斷然交戦權を發動せよ

蓋し事變取扱の不利は我が交戦權の放棄でないまでも之に均しき程度の自制的不使用である。客觀的に見れば交戦狀態の自發的否認である。斯る事情の下に於ては第三國は我に對し國際法上謂ふ所の中立義務を認めざるのみならず、現に我が軍事行動の結果による第三國權益の損害要償をすら主張し維持しつゝある實況である。手近き最も不合理な一、二の例を擧ぐれば、所謂租界問題！ 是れは我が占領下の都邑にある外國租界が占領軍の安全と、そして帝國の國策を公々然妨害する敵政權側の暴行根據地となつて居る。今一つはあの沿岸交通遮断である。封鎖と云はず、交通遮断といふところに特殊性があるのであります。即ち南北數千

キロの支那沿岸の封鎖を現に二年近くも當つて居る、我が海軍艦船の將士は極端に云へば無駄骨を折つて居るといふことなのである。何となれば謂はゆる、交通遮断であつて封鎖ではない、國際法に謂はゆる平時の封鎖ですらない。單に支那艦船に對してのみ交通遮断を行ふのだといふ譯なんだから、第三國艦船は公々と大手を振つて交通遮断線を横行し、當り前ならば當然捕獲さるべき禁制品を輸送する。我占據地の背後側面に蠅の如く追へば散じ、散じては集まるゲリラ軍は此等所謂第三國船舶から物資、情報、武器等の支援あればこそ、あゝした蠢動が可能なのです。況んや所謂第三國船舶の少からざる部分は其實支那の船舶であつて、單に第三國に偽裝的轉籍をしたまでで、即ち公然たる第三國々旗の濫用である。即ち今の遣り口にては夫の所謂交通遮断の働きをすらして居ないのだ。帝國軍艦の鼻先きを、偽裝的外國旗を誇らかに掲揚しつゝ公然國際法の所謂封鎖破壊

をやられて居ると云ふ状態なるのみならず、英國海軍は屢々之等船舶に對する我軍艦の船籍取調をすら公然と妨害して居るのです。租界を根據とする抗日テロの頻發は之れ實に外國法權の濫用的保護の下の一個のゲリラ戰である。所謂海上交通遮断の無意味の徒勞化は第三國々旗の濫用による封鎖破壊 (Blockade running) である。而して此の二者ともに長期抵抗戰の力源の發動であり、補給であり、充實である。斯様な馬鹿げた事態は斷じて此のまゝ持續さすべきものではなす。

結 言

之れを要するに、現前の事變の實態を其のまゝ見れば、蔣介石の國民政府は連戰連敗、軍事的には全く論外の醜態を連續し、今や邊陲の奥地に逃竄して糧かに餘喘を保つて居るのであります。然るに今なほ頑として長期抗戰を叫び、人民塗

炭の苦を敢て憚らざる所以のものは、明かに第三國の援助に依待してゐるからであつて、此に我が國の儼たる當然の交戦國としての權能を發動しなければならぬ理由があるのです。

素より一國家が他國と戦を交ふるや自ら交戦權なるものがあるものであつて、所謂第三國の權益といふものも、此の交戦權の裁抑を受くるのが當然であります。この點は詳述する迄もなく、極めて明瞭なことであるが、翻つて今次の事變を見るに、日清、日露の兩役は到底比儔すべくもなく、實に世界大戰に次ぐの一大戦争であつて、之れを戦争と呼ばず、事變と稱する事情は前に述べた理由に發して居ると雖も、永くこの状態を持續するといふことは聖戰の目的に合致せざるのみならず、彼をして無用の長期抗戰にいつまでも執着せしむることとなるのです。茲に於てか、この實勢に鑑み、苟くも國際法の許容する範圍に於て一切の手段

を行使し、徹底的に交戦目的の達成を期し、斷然國際法上正式の交戦權の發動を中外に宣布し、以て一舉敵の外援を斷ち彼等の抗戰意思と能力を封殺する事は一日も忽せにしてならないことであると思ふのであります。事變處理の捷徑は之れ以外にない。其の他の總ての方策は、この交戦權の運用の次善に用ひられる方策であると思ふのであります。大體之れ位にして御依頼の話を打切ること致しませう。

防共陣營を如何に強化する？

『防共』は對ソ盟約

(昭和十四年五月十日—十四日)
東京日々新聞連載

歐洲の危局、結局如何に發展すべきかは、神ならぬ身の豫斷に苦しむところなりと雖も、事態の險悪性は最近英國議會における徴兵法案の説明演說中チエムバレン首相の

「我々は現在まだ交戦行爲には入つてをらぬけれども、斷じて平和時代にをるのではなからず。戦争は數週間後といはず、數十時間後にすら勃發するやも計り難いのだ」

防共陣營を如何に強化するか

の一言に盡されてをる。然も歐洲再戦の勃發は取りも直さず、第二次世界大戦を意味するのだ。といふことは、理窟を抜きに世界一般の常識となつてをる。かうした情勢のもとに日獨伊防共陣營強化の必要が、三國々民の間に期せずして提唱せられるに至つたのは蓋し自然の數であり、帝國政府においても、すでに右の方向に向つて廟議を悉しつゝあるは地方長官會議における首相及び外相の最近の訓示によつても明瞭である。

三國關係強化の必要については國論はすでに定まつてをり、政府の決意も今や宣明せられた。要はこれを「どういふ風に強化するか？」といふ點にある。問題の核心はそこにあるのだ。

この點につき政府筋の機微なる動靜には、一切觸れずに一個の國際政治研究者として全然白紙の立場から所見の一斑を披露するに當り、こゝに第一にハツキリ

と確立して置きたい一つの命題がある。それはほかではない。即ち政府筋の公式的表現の如何に拘らず、われ／＼國民の常識としては防共協定、即ち對ソ盟約であるといふことなのだ。周知の如く本協定成立の當時、協定の目標は國際共產黨即ちコミンテルンであつて、何れの一國、または數國の集團をも對象とするものではないと、それぞれ當該各政府から説明されたが、コミンテルンと異名同體、世界革命を建國の使命とし國家の存在理由とするかれソ聯政府は右の説明にも拘らず、當然に本協定をもつて自己を對象とするものだとなし

「コミンテルンとソヴェト政府は全然別個の存在だ」

との年來の言分を一擲して漁業條約調印拒絶を手初めとし、あらゆる機會、あらゆる問題を捉へて厭がらせを敢てしつゝあり、ソ聯とイデオロギーを異にするけれども國防上の切要からこれと同盟を訂したあのフランス、そのまたフランス

防共陣營を如何に強化するか

を國防上自家の藩屏としてをり、また東亞における帝國の進展を悦ばざる立場にあるかれイギリスの如き、いづれも日獨伊防共協定をもつて名を防共にかれる現狀不滿國の合從提携だとして當初より排撃の態度に出てをつたが、支那事變の進展に伴ひ一面また歐洲における獨伊樞軸と英佛樞軸との關係の尖鋭化とともに防共陣營に對する英佛側の對抗的意識はますます深刻を加へつゝあり、現に獨伊包圍陣結成の關鍵として英佛ソ三國の間に同盟訂結の商議が進行中である。該盟約の適用地域が東洋に及ぶや否やの如きは、第二義的の問題に過ぎない。防共陣營主役者の一たる日本と、ソ聯の同盟國たる英國との間には親善提携の關係は本質的に出來ない相談である。況や日本自身が何と考へても、いかなる解釋を試みて見ても日本は現在の國際政局分野において獨、伊とともにいはゆるデモクラシー群と呼稱せらるゝ英、佛、ソと反對の陣營にあるといふのは世界の常識であり、

また争ふべからざる現實でもある。平沼首相は、その地方長官への訓示において「盟邦獨伊兩國との關係は今後ますます緊密鞏固ならしめ一層その効果を擧ぐるの必要なるを痛感する」といひ、有田外相また

「防共協定を更に一層強化し、帝國獨自の自主的立場に立ちつゝ、この緊迫せる國際情勢に對處して行く所存だ」

と聲明してゐる。帝國獨自の自主的立場なる語の意味は（一）首相のいはゆる獨伊兩國との盟邦關係と、そして（二）現にいはゆる東亞新秩序の聖業に百難を排して邁進しつゝあること、この二つの事實を指すものなるべく、それ以外には何等の意味があり得ないと思ふ。

また世界雄邦の一たる帝國の外交折衝はその盟邦に對すると將又何れの邦に防共陣營を如何に強化するか

對するを問はず、當然に自主的であるべきものだ、

英、米、佛の『諒解』——現實遊離の願望的思想

我國の一部には次のやうな意見が抱持されてるやうだ。即ち「防共協定はコミンテルンの活動に對處する上において我が外交の樞軸を構成するものであるが、東亞新秩序の建設と世界における日本の地位確立のためには防共協定だけでは足りない。この二つの目的達成のためには英、米、佛の諒解を必要とする。従つて防共協定をもつていはゆる民主主義列強を對象とする結盟と看做すは全然誤謬の見解である。日本と獨伊兩國との結盟はコミンテルンを對象とするものだ。それが全部であり、それ以上には何ものもなす。」

とかういふのである。かうした考へ方は、あまりにも現實と遊離した一個の願望的思想といはざるを得ない。なるほど防共協定による獨、伊との盟邦關係は益々これを強固にする。同時に英、佛、米にも巧く付き合つて東亞新秩序の建設にかれ等の同情的諒解を取りつけるやうにする！ そんな都合なことが出来るものとせば、それこそいはゆる兩手に花であるけれども、世智辛い國際政局の現實においては、さうは問屋は卸さなす。

すでに一昨昭和十二年暮、伊國の参加により防共による三國の結盟が成立するや、當時ブリュッセルに開催の九國條約會議の席上、フランスのデルボス外相は「一體他國の内政に干渉を敢てし、或ひはまた或種の政治形態に對して、或種の國が相結んでどうかしようといふが如きは、國際の公理において許すべからざることである。かうしたイデオロギーや政體論を基礎としての、列強の集團

防共陣營を如何に強化するか

構成は國際平和の見地からいつて甚だ好ましくなく、
と宛然共產ロシアのスポークスマンのやうな口吻で、防共三國陣營を排撃して
をる。

今日かれ等自身

「世界は今や民主主義グループと全體主義グループとの對立だ」

などと現下の國際危局が偏にイデオロギーの衝突なるかの如くに宣傳し、甚だ
しきは共產ロシアを民主グループに、皇道日本を全體主義グループに勝手に數へ
込んで、無邪氣な世界大衆を嚇しつけんとしてゐるのは、僅一年半前のブリュッ
セル會議におけるその所論に對照して滑稽な悲、喜劇と申すべきである。

話は岐路に入るが、前述の九國條約會議における佛國外相の氣焰と前後して、
大戰當時のタイムス主筆で外交問題では依然國民的指導者の地位にあるウィツカ

ム・ステイードは、そのタイムスへの投書において、かういつてゐるのだ。曰く、
「英國はナチも、ファッショも、コンミニズムも、その何れをも同じやう
に嫌ひなのだ。さりながら國際政治においては他國の政治形態が、どうあらう
と、これを問題にすべきではない。その國の對外國策の目標及び動向が何れに
あるかをのみ標準として向背取捨を決すべきである。例へば日本はファッショ
でも、ナチでも、また固よりコンミニズムでもないけれども、日本の國策の
目標は現狀打破であつて我々の立場からいへばアグレッシヴ（侵略的）國家で
ある。我が英國は米國と共に、またフランスと共に平和を愛好する。現狀に満
足して他國の有つてゐるものに對して何等の野心も欲求も持ち合せないのだ。
かういふ我々現狀満足國の方にソヴェトロシアがはいるのである。何となれ
ば、ソ聯邦は今日の世界においてかれ自身の有つてゐる領土及び資源に満足し

防共陣營を如何に強化するか

てをるので、他國の有つてをるものに對し何等の慾望も有たない。即ちアグレ
ツション（侵略）をやらない國である。それであるから對外政策の動向と指導
原理の點においては、ソヴェエトと英、佛とは同じである。」

と喝破してをる。これが英國やフランスやそもくまたルーズヴェルト氏一味
の米人の本音なのである。全體主義だとか、民主主義だとかいふのは、例へば赤
帽組だとか、白樺班だとかいふが如く、見分のつき易いやうに便宜上使用されて
る呼稱たるに過ぎないのだ。然るに、それを變に頭痛に病んで

「日本は全體主義國でないといふことをはつきりさして、アメリカ邊りの誤解
を解かねばならぬ」

などと言ふのは、あまりにも日本における外交思想の低調を物語り過ぎる。つ
最近も例のイーデン前外相は

「歐洲の危機に直面して英國外交に再吟味を加ふると同時に宜しく英國と利害
と立場を同じうする總ての國々——それが地球の何處にあらうと——さうした
國々との間に遲滯なく協議相談を開始すべきである。外交上我々の關心すべき
は他の國の政治形態ではなく、その對外行動である。他國政府の政治が黒たら
うが、白だらうが、桃色だらうが、赤だらうが、そんなことは我々にはどうで
もよいのだ。さうした政府が我々と共に平和の擁護に當る用意がありや否やの
點こそ我々に取つて大切の問題なんだ。」
と演説してをる。

斯の如く英佛側では、初めからソ聯邦を自分の方の仲間公然と入れてをるの
だ。米國の現政権の意向もまた累次の機會において表明されてをる。即ち日本を
もつて獨、伊と共に侵略國グループの主役なりとし、現に最近のヒットラー、ム

ツソリーニあてメツセージ中にも、「歐洲においては昨年來三箇の獨立國の抹消せられるあり、極東においては一獨立國の領土の廣大なる部分が別國の占據するところとなれり」と餘計なところまで日本を引合に出して誹謗を加へてをる。上院外交委員長ピットマン氏の日本に對する毎々の惡口は、こゝに指摘するまでもあるまいが、つゝ一兩月前にも

「米國民は元來日本とドイツを大嫌ひなんだ」

との暴言を吐いてゐる。いはゆる民主主義グループに屬する列強がかうした態度を持してゐるのは、偏に彼等に共通の世界觀、即ち所謂現狀満足國と現狀不満國との對立意識から來て居るので、決してイデオロギーや政體の異同に因るのではない。

國際正義の再建を叫んでゐる日本、東亞新秩序建設の聖戰に百萬の大軍を動か

して邁進しつゝあるこの日本は、假りに獨、伊との盟邦關係がなくとも斷じて所謂現狀満足國の仲間には入れて呉れないのである。

『討日』の切札ソ聯——鋭し英誌の事變見透し

更に各論的考察としてこの場合目前の支那事變における日、英、ソ各自の立場に一瞥を拂ふの要がある。東亞新秩序の建設は當然に蔣介石政權の潰滅を意味する。しかもその蔣介石は、蘇峰翁の所謂英國の番頭なんだ。英國は何處までもこの番頭先生を支援し激勵して長期抗戰をやらせ、戰局の長期化によりて日支勝敗の地位を逆顛させようとしてをるのだ。かうした蔣政權援助は決して一時の思ひ付きや愛憎の動きから出發した浮氣の沙汰ではない。

一九三五年の幣制改革によつて支那を全然英國の金融的、經濟的從屬國に化し

防共陣營を如何に強化するか

てしまつて以來、一貫して遂行されてゐる國策の現れなのである。日英關係の内容を構成するものは主として日支關係であることは數年前、ある機會にタイムズ紙が喝破せる如くである。これをいひ換へれば日支關係は、その大部分が日英關係の反映であるといふことなのだ。事變發生當時から自分は、

「正面の敵である支那ばかりを見てをてはいけない。支那の戦力は主として英國の支援に依存してをる。これと同時に量的には程度は低いけれども、質的には英國と相並んで勢力を及ぼしてをるのはコミンテルンをして魔手を揮はしめつゝあるソ聯である」

とわが同胞に警告してをるのであるが、實に英國は事變の當初から事態の發展性に對し驚くべき正確な見透しをつけ終始一貫その見透しの下に局面の推移に對處し或る程度まで指導的の役割を働きつゝあるのだ。少くとも英國自身の主觀で

はさうなのである。

この點につき、こゝに紹介せんとするは、英國政論界に特殊の權威的地位を有するかのラウンド・テーブル誌一九三七年九月號所載の一論文である。この論文は同年八月、即ち事變勃發後一ヶ月も経たない——いはば勃發のその瞬間に執筆されたものだ、との斷り書が付いてゐるが事變の契機となつた蘆溝橋事件は全く一個偶發の出來事であつて、世人の疑ふやうな日本側の作爲でない、と先づ公平ぶりを示しつゝ、

「日支双方共恰度先の歐洲戰破裂當時の列強政府のやうに、互に恫喝と驅引を弄し過ぎた結果、遂に引込のつかない始末となつて、こゝに全面的戰爭の展開を見るに到つたものだ」

といふ意味を述べ、それから戦局の發展性については、

防共陣營を如何に強化するか

てしまつて以來、一貫して遂行されてゐる國策の現れなのである。日英關係の内容を構成するものは主として日支關係であることは數年前、ある機會にタイムス紙が喝破せる如くである。これをいひ換へれば日支關係は、その大部分が日英關係の反映であるといふことなのだ。事變發生當時から自分は、

「正面の敵である支那ばかりを見てをうてはいけぬ。支那の戦力は主として英國の支援に依存してゐる。これと同時に量的には程度は低いけれども、質的には英國と相並んで勢力を及ぼしてゐるのはコミンテルンをして魔手を揮はしめつゝあるソ聯である」

とわが同胞に警告してゐるのであるが、實に英國は事變の當初から事態の發展性に對し驚くべき正確な見透しをつけ終始一貫その見透しの下に局面の推移に對處し或る程度まで指導的の役割を働きつゝあるのだ。少くとも英國自身の主觀で

はさうなのである。

この點につき、こゝに紹介せんとするは、英國政論界に特殊の權威的地位を有するかのラウンド・テーブル誌一九三七年九月號所載の一論文である。この論文は同年八月、即ち事變勃發後一ヶ月も経たない——いはば勃發のその瞬間に執筆されたものだ、との断り書が付いてゐるが事變の契機となつた蘆溝橋事件は全く一個偶發の出來事であつて、世人の疑ふやうな日本側の作爲でない、と先づ公平ぶりを示しつゝ、

「日支双方共恰度先の歐洲戰破裂當時の列強政府のやうに、互に恫喝と驅引を弄し過ぎた結果、遂に引込のつかない始末となつて、こゝに全面的戰爭の展開を見るに到つたものだ」

といふ意味を述べ、それから戦局の發展性については、

防共陣營を如何に強化するか

(1) 蔣介石の誇りとする中央軍も、七百機を算する空軍も、大體において日本軍に對しては頗る劣弱である。

(2) 然し雖て戦争がゲリラ戦に轉化してくると、日本側の有利性もだん／＼割引を見るに至るだらう、何となれば支那共産軍の戦績で示されてをる如く、ゲリラ戦には支那の兵隊と土地は共に特異の適格性を有つてをるからだ。

(3) かうして戦争が長引けば長引くほど、日本における財政的崩壊や社會不安の可能性を増大すべく、

(4) そこでソ聯邦の武力的登場あるひはまた

(5) 他の列強による調停の可能性がより増大することとなる。

と、かう明記してをる。詰り本格的の戦さでは勝味がない。そこでゲリラ戦となる。即ち長期抗戦だ。長期戦となれば日本は經濟的に參る。そこでソ聯が武力

で登場する。

そして英國を中心とする列強の調停、即ち干渉で戦さを終了させる。と、かういふのである。これが事變勃發の殆どその瞬間に英國外交に指導的の勢力を有するラウンド・テーブル・グループ——そのグループの大御所であり英米提携派の巨頭として米國側にも深き接觸を有するロシアン侯爵、つい最近に駐米大使に任命せられた——が、その機關誌で公表した對事變策の指導原理である。爾來二十幾月の経過に徴するに、英國政府の事變對策は全く前叙の指導原理の下に行はれてをることは何人も否認が出来ぬだらう。われ／＼日本側としては思ひ半ばに過ぎるもの少しとせぬ。なほ論文の末段には

「英國としては調停の機會を苟も逸することなきやう鋭意注視を要すると同時に、日本をして、その政策を緩和せしむるの切札は英國の手にはない。これを

握つてゐるのはソ聯である。」

としてゐる。これは日本を取つて抑へるに必要な武力を英國は持ち合さない。それにはソ聯を使ふ。それから英國が米佛等とともに調停、即ち干渉をやつてこの戦争を終局させるといふのである。なほ

「香港シンガポール間の交通の死命を制する戦略要地である海南島の占領は、如何なる事情の下においても英、佛兩國の斷じて許し能はざる」

旨をはつきりと日本政府に明示して置くを肝要とする、と結論してをる。事變勃發當時、全面的戦争の展開だとの見透しは未だしとしても、海南島占領の可能性にまで想及して、ちやんと對策を示してをる如き、さすがに一國外交の指導者としての威容を見る。

兎に角、英國は事變勃發當初から戦争の長期化により、日本をして歐洲戦にお

けるドイツと同様の悲運に陥れることを指標として、あらゆる策謀を盡しつゝあり、しかもソ聯は英國によりて、この計畫實施の上の一大要因とされてをるのである。

さうした實勢の下に在支權益問題における宋襄仁的讓歩や區々たるヂエスチユア外交によつて東亞新秩序建設に對し何等かの諒解を英國より取り付けんとするが如きは、何としても一個獨善的の空望に過ぎない。現に本年一月の英國政府公文には、

「日本政府の所謂東亞新秩序なるものは、日本の腦中に存在する一概念たるに止まり既成の現實になつてゐないぢやないか」

と、からかつての始末である。上叙の如き英國の態度は同時にまた大體において米國の態度でもある。フランスに至つては、こゝに擧げるまでもない。かうし

中立は戰後最大... 國際平和に對する大連軍の重要

中立は戰後最大... 國際平和に對する大連軍の重要

現世の國際情勢はガエナナニ及びマントン體裁の當然の決定に他ならぬ

よりはむしろ同一體制の裏表たるに過ぎず、そしてこれを一貫する指導原理は、アングロサクソンの世界支配性といふことなのだ。これは自分の一家言ではない。英、米、における識者、權威者も今日では公然と容認してゐることなのだ。例へば一九三七年オックスフォード大學出版部刊行の「世界における英帝國」と題する書中に「日本問題」なる一章には次の如く書かれてある。曰く――

日本も亦獨、伊兩國同様に世界大戰の清算で酷い目に遭つたのである。といふよりは日本は寧ろ、その最後の清算でやられたのだ。それはどういふ事かといへば日本の場合においては世界大戰の清算は二回あつた。その第一回、即ちパリ會議では日本は相當の利得をしたのであるが、第二回清算の華府會議では日本はとても酷い目に遭はされた。華府會議は英米全權の指導下に、然も英、米の外交關係史に曾て見たこともない程の完全、且つ効果的な共同動作で、英米

防共障壁を如何に強化するか

兩國とそして兩國の理想とに適合するやうに極東を料理したのである。日英同盟も葬つた。ヴェルサイユ條約調印によつてドイツ海軍からの脅威がなくなつた結果、英國は幸ひにも日英同盟を葬つて米國の歡心を買ふことが出来た。巧妙な口説でジリジリと加へられて行つた英米の重壓の下に、日本は支那における自國の地位の解消を諦観することになつた。パリの講和會議で認められた、山東省における特殊權益は棄てさせられた。支那における日本の特殊地位は九國條約によりて否認された。そして擧句の果てには五・五・三比率強請の海軍力制限を受くることとなつた。道徳的にも、物質的にも華府會議の成約たる諸條約は凡そ二箇の友邦が一つの第三國に對し與へ得る限りの最も痛烈な打撃を日本に與へたものである。(同書二八、二九頁)

また曰く――

大戰後十五年間、歐洲の安定は「ドイツの劣弱性」を礎石として維持せられてをつた。然るにヒットラーを總統とするナチスドイツの出現以來、ドイツは非常な迫力と能率を以て、グンダント、その經濟力と國防力を築き上げ、これを背景として沈勇果敢に外交を遂行した結果、右の歐洲の安定はこゝに崩壞を見るに到つた。目前は頗る覺束ない不安の平和維持を保ち得べきも、その均勢たる實に岌々として、これ危し。云々(同書三六頁)

また曰く――

抑々ヴェルサイユ條約の不衡正はドイツの如き大國民の長く忍耐し得べきものではない。況やドイツは經濟上いろ／＼の不滿苦情を有つてゐる。ドイツの主張には少からざる正當性があるのだ。またイタリアはエチオピアに對し、あゝした無法な侵略を敢てするに到つたが、イタリアをしてこゝに到らしめた環

境の不滿と、その焦躁には、これまた正當視さるべき事由がある。獨伊の何れにしても故意にヨーロッパ戦争を計畫してゐると見做すのは穩當ではない。なるほど獨伊では兵力を禮讚し、數百萬の青少年に軍事教練を施しつつあり、また常に『平和』と國際聯盟に冷罵を加へてゐるが、ヒットラーでもムッソリーニでも世界に向つて絶えず戦争は、その欲する處にあらざる旨を確言してをり、またその誠意を疑ふべき理由を我々は有たない。(同書三五頁)

記憶せよ、右の論文は、一九三五年三月まで十年の久しき、英國外務省情報部長の地位にありたるサー・アーサー・ウイラートの筆になつたものである。かくの如くヴェルサイユ、ワシントン兩條約によつて作られた平和機構なるものは、英國外務省の一大官の論策に淡泊に容認されてゐる通り優秀なる大民族に對し、その當然の矜持と要望とを永久に抑壓せんとするものであつて、固より恒久性のあ

るものではない。つひにその當然の反動が來た。英米偏重の基礎工事で出來てをる平和の殿堂は、今やその重心を失して右に、左にと動搖、英國首相の言葉をかりていへば、數十時間以内にも倒壊を見るかも知れない情況にある。この『平和の殿堂』を未倒に濟ふには速かにその失はれたる重心を取返さしむるにあり、その觀點からすれば、此際獨伊との防共協定に一步を進め、現下の國際情勢に即應すべき一般的ブロックを三國間に形成することは、かの英米偏重の偽裝的均勢を是正して、世界安定の重心を樹立する所以だと思ふ。さなくとも、華府體制の犠牲としてこれが桎梏脱却のため幾回か悲壯な闘争を餘儀なくされつゝあるわが日本として、獨伊との間にかうした一般的結盟の關係に入るとするも、むしろ當然の歸趨なると同時に、かうした一般的ブロック形成こそ、實に世界の平和維持に對し帝國が與へ得べき最も適切有効の貢獻なのである。

即ち萬一の場合、帝國としては所謂民主グループに左袒せざるまでも、單に中立の地位に起つだけにも、民主群の重力は今日以上著るしく増大すべきこと明瞭である。従つて斯る態度は、勢ひ英佛等をしてかれ等が内心正當性を認めつゝある獨伊側の或種の要求事項に對してすら、愈々もつて頑強の反對を固執せしむることとなり、勢の赴く所、兵火の破裂を激成するに到るの危険なきを保せず。これに反し、この際日、獨、伊の間に一般的ブロックの形成を見んか、無敵海軍の制壓下に印度太平洋兩洋の重要部分を置くところの帝國日本を敵に廻すことは英國の容易に敢てし得るところに非ず、また英佛等の待望する如く米國の參戰ありとするも、米國艦隊の主力は勢ひ太平洋に惹きつけられることとなるの結果、かの前回の歐洲戰において、米國がその海軍の殆ど全勢力を大西洋に派遣し、英國海軍を援けてドイツに鐵桶的封鎖を加へ、遂に降を軍門に乞ふに至らしめたる如

きことは、これを再演するに由なきは明かである。かく觀じ來れば帝國にしてこの際民主グループと獨伊樞軸間、萬一の場合、局外中立の容諾を與へるが如きことあらば、すでに一發千鈞の危ふきに瀕せる均勢の偏重をますます増進し却つて局面の破綻を促すの逆効果を呈するに至るべく、世界平和の擁護に重責を有する大國日本として斷じて採るべき途に非ずと信するものである。

註 四卓團 前述の本文中にあつた英國のラウンド・テーブル・グループ(四卓團)といふのは、英帝國及び國際問題に關する權威ある記事や論說で有名な季刊(年四回)雜誌ラウンド・テーブル(マクミラン社發行)を實際に支配するロシアン侯、ライオネル・カーチス氏、H・R・ブランド氏、ホドソン氏(主筆)等を含む一團をいふ。ロシアン侯は大戦前數年間ラウンド・テーブル誌の主筆を勤め、大戦中ロイド・ジョージ首相の秘書となりその後マクドナルド、ボールドウィン聯立内閣のインド省次官にもなつた。去月駐米大使に新任された點から見てもチェムバレン首相との關係淺からぬことを示してゐる、カーチ

防共陣營を如何に強化するか

ス氏は學者であり政治家で、多數の著書のうちには支那問題（一九三二年著）に関するものもある、ブランド氏は學者であり、銀行家であり、實業家であつて、パリ平和會議當時セシル卿の財政顧問をつとめたこともある。

相互援助條約締結へ——軍事協定はドウする、條約試案

現下の國際情勢に直面し獨伊との關係はコミンテルンを對象とする防共結盟に止め、それ以上に及ぼさずとの思想は取りも直さず一種の洞ヶ峠主義であり、二股政策でもある。洞ヶ峠は武士の國たる日本によるべき陣地でないとの面目論はしばらくこれを措き、單に利害の觀點からいつても安全の地點でなく却つて敗亡への途である。これは筒井順慶以來の史實の明示するところであるのみならず、由來相對する二大勢力の間に二股をかけるのは、弱小國の外交に於て往々見ると

ころなるも、弱小國の行き方とても危険至極の邪道であることは眼前に展開されつゝある歐洲政局の波瀾の中にも、その例を指點することが出来る。いはんや世界政局の安定に決定的の貢獻寄與をなすの責務と實力とを有する大國日本として斯ることは自ら辱かしむるゆゑである。かうした二股主義的思潮は去る三月頃議會における質問應答の表裏に流露し、英米方面から相當輕侮を買つてをつたやうに見受けたが、今日では所謂防共陣營強化の壓倒的國論に押されて、この種の思潮は一應解消に歸したやうだ。

しかして所謂防共陣營強化とは今日の防共協定に一步を進め日獨伊三國に共通の政策、利益の擁護を目的とする相互援助條約の締結を意味する。これまた大體一般の諒解に一致する所にして、今や問題は條約の對象を

(A) ソ、聯邦に限るべきか、將た

防共陣營を如何に強化するか

(B) ソ聯邦のみならず、條約に豫見せらるゝ事態發生の場合、他の何れの國に對しても適用せらるべき所謂一般的相互援助條約となすべきかの二點に歸してゐるものやうに見られる。

右A、B二案何れも日獨伊關係の強化には相違なきも、實際的考察をもつてすればA案の如く單にソ聯邦を對象とする同盟ならば、これは現在の防共協定に形式上の整備を加ふる程度の話に過ぎず、目下の場合、關係國何れに取りても格別の魅力を感じざるべく、況んや現下の實情としてはソ聯は明かに英佛陣營の一大要員であること、ロイド・ジョージ氏最近の演説にも白狀せられてゐる通りである。

獨伊と西歐民主國側との間に戰端破裂を見る場合には、ソ聯は當然に英佛側に加擔して獨伊に當るべく、この場合、獨伊の盟邦として日本はソ聯相手には戰ふ

がソ聯の同盟國たる英佛に對しては中立の地位を守るといふが如きことは、常識論としても思念し得られざるところである。既に英佛の盟邦たるソ聯を相手に戦ふ以上は、同時に英佛とも敵對の關係になるは條理の必至性である。一面また國內政治の問題としても一とたび獨伊とソ聯の間に戦ひが始まつた場合には、その交戰原因の如何に拘らず、日本が袖手傍觀の地位に立つことは、國民の感情に於いて到底許さざるところだらうことは火を睹るよりも明らかと思ふ。して見れば、獨伊兩盟邦との相互援助の目標を、單にソ聯邦にのみ局限することは、結果において相互援助の否定となるべく、いはゆるソ聯一本相手の同盟條約といふが如きは畢竟文字上の遊戯に過ぎない空案たるを免れない。或は又「同盟の對象はソ聯邦に限ると同時に、若し第三國にしてソ聯邦を援けて參戰するものありたる場合、相互援助は、右の第三國を對象としても與へられることとすれば如何？」と

防共陣營を如何に強化するか

一九七

の説も起り得べく、折衷案としては一應の妙味を感ぜざるにあらざるも、この案による時は、締盟國の何れかがソ聯以外の國から攻撃を受くる場合、ソ聯にして中立の地位に立てる限りは他の同盟國の援助を受け得ざることとなるべく、締盟國何れに取りても有難味のないものだといはざるを得ない。

かた／＼以て日獨伊三國關係の強化はどうしても一般的相互援助條約によるの他なしと思ふ。しかしてかうした條約には特定の國家（單數または複數）を同盟の對象として指定するものに非ざることとは實務的問題としてこゝに特に説明するまでもないと思ふ。

右に關聯してこゝに一言し置くべきは、同盟は必然に一定の條件下における軍事的援助を伴ふものもあるけれども、さりとて同盟條約なるものは必ずしも右軍事的援助に關する具體的の協定を盛るの必要がないといふ一事である。多くの場

合かゝる事項は締盟國軍事當局間の協議事項として、別個に取扱はれるのを常とする。往年の日英同盟締結の際もさうであつた。殊にこの種の軍事協定なるものは統帥事項に關聯すること多かるべきをもつて、これが處理には頗る慎重の用意を要す。況んやまた單純なる實務的觀點よりいふも、今日のやうに戦争そのものの性質が非常に複雑化し、一面科學の著進に伴ひ、兵器従つて兵術の變遷が頗る急調なる現状にありては、軍事的協定なるものは、成るべく弾力性に富み、イザ鎌倉といふ場合に動きの取れないやうな弊なきを期せねばならぬ。詰り事前の筆記的協定よりは、關係國軍憲間の不斷の接觸、隔意なき意見の繼續的交換こそ肝要なのである。現に獨伊兩國間においてすら昨今に至り漸く局面の須要に即應すべき軍事協定の協議を進めてをる有様である。さういふ次第から問題の相互援助條約には單に相互援助に關する原則的規定を掲げるに止め、軍事的援助に關す

防共陣營を如何に強化するか

る事項は締約國軍憲間の隔意なき協議に譲ることを賢明とする。若し又軍事協定の内容を構成すべき事項につき盟邦軍憲間に一應意見不一致の點がありとしたところが、それはこれら當局間の虚心坦懐なる研究討議の題目とこそなるべきものであつて、同盟條約成立の障礙となるべきものではない。

現に前回の歐洲大戰に際し英佛兩國は安危存亡を共にして戦つたのであるが、兩國の間には何等成文的な軍事協定があつたわけではない。戦前數年來兩國軍事當局間に、ある一定の假想の下における共同作戰實施上の研究事項として絶えず意見交換が行はれてをつた、その結果が實際の作戰に應用されたといふまである。かういふ一例も目下の場合、大いに参考に資すべき價值あると思ふ。愚見に
1102

(A) 日獨伊現存の防共、文化兩協定はこのまゝに存置し、

(B) 更に三國は現下の國際情勢に鑑み、全局の平和維持に寄與するの見地に立つて三國の共通政策並に三國間に相互に承認せらるべき各自の特殊利益擁護を目的とする相互援助條約を締結することとし

(1) 前記の共通政策並に特殊利益の擁護に關しては三國は常に隔意なき十分の協調を保つべく、

(2) 右政策並に利益が何等かの事情により侵迫を受け若くはその虞れあるの事態發生の場合にはこれに對處するため採らるべき措置に關し相互の間に隔意なき協議を行ふべく、

(3) 三國は上記の「政策」及び「利益」に關し互に支持を與ふべきこととす。

大體以上の趣旨の條約を締結してしかるべく、軍事上の協定は別に締盟國軍憲

防共陣營を如何に強化するか

の間に行はしむることとし、かくて速かに本問題を解決して、うち國民の眞意に應へ、外、世界の安定に資すべきであると思ふ。

現前の時局と我が外交對策

(昭和十四年五月二十四日 於東亞同文會)

一、序 言

只今は大變過溢なる御紹介に預り痛み入る次第であります、實は本日はドウいふ話をするのか、同文會で演題を掲げて通知して居られる葉書を頻に探がしたのですが、遂に見付かりませぬ、只今司會者より伺ふと、頭書の通り非常に廣汎な題目になつて居る。實は私は甚だ勝手な私案を抱きつゝ參つたのでありますが、司會者の御披露もありましたから、一般の國際情勢に關して私が今日只今ドウいふふうに見て居るかといふことを、極めて簡単に先づ申して見ます。

二、歐洲は再び戦ふや

先般日本外交協會で大分長い話をしましたが、當時は、英國首相の議會に於ける演説にも言はれて居る如く、歐洲平和の破綻は數日後にすら起り得ると——少くとも英佛側ではサウイふ心持で居つたやうであり、またアメリカに於てもルーズヴェルト政権は専らサウイふやうに内外の人心を利導しようとし、従つて世界一般に如何にも不安不穩の——暗雲低迷どころぢやない、今にも迅雷疾風となるかの如く考へて居つたのであります。

然るに其後の情勢を見ると、歐洲の低氣壓はどうやら此のところ暫く何處かに去つたやうだ。それはドウいふことを意味するかと云へば、先日來の外交戦は完全に獨伊樞軸の勝になつたのであり、英佛側の負であります。蓋し、——一ヶ月

前に日本外交協會でも私の所感を述べて置きましたが、——獨伊側に於ては別に戦争をしやうと云ふ氣分で居るのではない。差當り急を要すると思ふ極く當面の問題だけは、戦はずして自分の満足するやうに解決し得る、武力に於ては英佛より十歩も二十歩も先に進んで居るといふ自信ある立場にあるのです。之に反して英佛の方ではこの調子では、所謂武力外交で何處迄やられるか判らぬ。二度も三度も武力外交で痛めつけられた、殊にヒットラーといふ——實はナポレオン一世以來の代物相手だ。二十世紀のナポレオン一世だ。この先生が、ヴェルサイユ條約による不公正なる待遇、即ち今日では英佛側と雖も其の不公正を認めて居る、ヴェルサイユ條約の、さういふ點の修正改善に付いて、談判に依つて修正出來なければ獨自の力でやるぞと云ふのに對して、英佛としては、現状の修正を要する點のあることは少くともヴェルサイユ條約に關する限り認めるが、その修正は

平和の商議に依るべきである、昨年九月のヒットラー、チエンパレンの共同宣言の文句にあるように相談コンサルタツションづくで行ふべきであつて、一方的行爲で之は不都合だからコウ是正すると云ふべきものではない。今まで獨逸が一方的行爲で現狀修正をやつた點に付ては概して本質的には獨逸の主張の正當性を認めるが、本年三月の十四日から十五日に掛けて、一晩で殘存チエツクを獨逸が呑んでしまつた、あれは昨年九月のジュデーテン問題とは譯が違ふ。昨年九月のはドイツ民族を獨逸國の傘下に入れようとする問題である。しかも三百何十萬の人間が大體に於て一塊りになつて居住して居る、之を民族自決に依つてチエツクから離さうと云ふのである。それに付ては其手續方法に非議すべき點があつたとしても、問題に關するドイツの主張自體に道理があると認めざるを得ない。だからミュンヘン協定であの通り譲つた。併し乍ら今度は、七百萬のチエツク人を一晩で呑んでしまつたり、二百九十萬のシロヅアクを恰も日露戦争直後の朝鮮みたやうに一種の保護領にしたりした、斯かるは正しくヨーロッパ大陸の覇權ヘゲモニーを狙つて居るものであり、世界制覇ワールドドミニオンの野心の現はれである。コウいふのは我々はドウしても排撃ストしなければならぬ——と斯ふいふ風に英國が考へて居るのである。斯の如く英國側では、どうもヒットラーの野心は、ドイツ民族を統一するとか或はヴェルサイユ條約に依つて破られたる國家の名譽及び威嚴或は國安保障を恢復しよう云ふに止まらない。彼れはナポレオン流に世界制覇の野心を持つて居る。だから之を取つちめなければ、この先何をするやら判らないと、サウいふふうになつても民衆に吹込み世界にも宣傳して居る。否、これが今やイギリス人一般の感情となつて居るのである。

でしまつたり、二百九十萬のシロヅアクを恰も日露戦争直後の朝鮮みたやうに一種の保護領にしたりした、斯かるは正しくヨーロッパ大陸の覇權ヘゲモニーを狙つて居るものであり、世界制覇ワールドドミニオンの野心の現はれである。コウいふのは我々はドウしても排撃ストしなければならぬ——と斯ふいふ風に英國が考へて居るのである。斯の如く英國側では、どうもヒットラーの野心は、ドイツ民族を統一するとか或はヴェルサイユ條約に依つて破られたる國家の名譽及び威嚴或は國安保障を恢復しよう云ふに止まらない。彼れはナポレオン流に世界制覇の野心を持つて居る。だから之を取つちめなければ、この先何をするやら判らないと、サウいふふうになつても民衆に吹込み世界にも宣傳して居る。否、これが今やイギリス人一般の感情となつて居るのである。

三、英國の米蘇抱込運動

サウイふふうには臆病風が吹いて來ると、今度は今にもヒットラーが亂暴しさに思はれ、ムッソリニも此の響に做ふであらう。この儘ではヨーロッパは、いつ何時、それこそ數十時間後にも戦争の破裂があるかも知れぬ。對手があゝいふヤリ口をどんくやるからと云ふので。まさに狼來れりを叫び出したものです。

茲に於て議會の在野黨、保守黨内でも極右のウインストン・チャーチルの如き老政治家、或は之と對蹠的に若手を代表して在野黨にも受けのよいイーデンなんといふ先生、要するに自由派と武斷派とを問はず、或は右と左とを問はず、コンナ情勢では蘇聯とガツチリと手を握らねばいけないと云ふ空氣である。

然るにそれに對して政府は餘程逡巡躊躇して居る。その逡巡躊躇するのは、色

々な事情もありませうが、第一にネヴィル・チェバレンその人の個人的性格が、政策としてはソヴェットを抱き込んで其の武力を用ひる外ないといふことを、認めつゝも何分にも氣分が進まない。けれども歐洲の形勢が、イギリスから見て段々危険になるに従つて、遂に首相も自分の氣分に打ち勝つて、三月の末頃でありましたか、ロンドンのソヴェット大使館に行つた。之は食事でも共にしたのでせう、ウインストン・チャーチルは「總理大臣も漸くソヴェット大使の所に行かれた、之は及第點だ」と當時言つてゐるのを見ると、今まで氣が進まなかつたのを克服してソヴェットの大使と交驩する。而して一面に於て政府は貿易長官ホヂソンをモスコーにやつて——之はベルリンからポーランド、バルチック三ヶ國、スカンヂナヴィアを所謂通商商議の爲に歴訪する豫定であつたのであります、モスコーに行つて、通商商議の表向の談判のほか、一體獨伊樞軸と英

佛派とが戦ふ場合にソヴェットは英佛に對しどれ位のコントリビューションをなし得るか、例へばどれだけの空軍をポーランドなりベルギーなりに出し得るか、と云ふことを突きとめる使命を持つて居ると云ふことが、當時の英國新聞に出て居つた。總理大臣の気分は少々はにかむ方でも、政府としてはグン／＼ソヴェットの方に近づき、ソヴェット抱込に進み寄つた、つまり「狼來れり」で、ヒットラー、ムッソリニが何をするか判らぬ。だからソヴェットをこちらの仲間に入れて置きたいと斯う云ふ譯なんです。

アメリカに對しても豫てからやつて居るところの宣傳工作や抱込工作を進めたに違ひない。私が「アメリカ」といふ時には、ルーズヴェルトと國務卿ハル、つまり米國の現政權をさす。ルーズヴェルト政權と云つた方が寧ろ私の感じには適合して居る。ルーズヴェルト政權は、對内的の立場から云つても、どうしても一つ

ヨーロッパ戦争に火をつけたからう、ニューデイルに依る經濟的社會的行詰り打開に成功しない以上は政權維持のためにも人心を外に轉向せしむるの策を採らざるを得ない。だから、ルーズヴェルトは一昨年十月六日のシカゴ・スピーチで、有名な侵略國隔離の要を唱破した。あれは主として日本を目指したのですが、それから「又デモクラシーの安全のため、或は法律に依る國際生活の規律を擁護するため、よその國が正義及び國際生活のために戦ふ場合にアメリカは傍觀して居る譯に參らぬ。アメリカもアメリカとしての寄與貢獻をすべきものだ」とか、或は又ツイ數月前に「アメリカの國境はラインにある」とか「フランスにある」とか、——之は後に取消はしたが、フランスで非常に喜んで當時コメントしたところを見ると言つたに相違ない。——いふふうに、直に戦争に飛込まないでも、歐洲に戦が始まればアメリカはデモクラシー側に援助を與へる。言ひ換へれば軍

需品其の他の經濟上の援助で、つまり戦争景氣をアメリカで展開させることが出来る。若し又場合に依り、イギリス、フランス、ソヴェットと結んで日支事變で日本を取つちめることが出来れば、之は確かに米國外交史上に輝く一頁を加へるものである、サウイふことも夢見てゐる。夢見て居るといふのは、現にアメリカの直撃な學究及び識者にして態々直面目な本を書き、ルーズヴェルトは斯くの如くにしてアメリカを世界戦争或は日本との戦争に導きつゝあると、コウいふ注意を國民に促す——さうした書物が既に數種も出て居るのを見ても判る。例へば最近東京日々新聞に二回ばかりに亘つて紹介された分の如きもつまり『米國政府は英國の宣傳に乗つて國際戦争に火をつけ、若しくは之に飛込まんとし、殊に日本相手の支那問題に付ては斷然引きつこはないのだ』といふ觀察であつて、ルーズヴェルト政權の外交政策の危險性に付て國民の注意を促した書物の一つであります。

ます。

四、歐洲不安の眞因

だからヨーロッパ政局の低氣壓は、寧ろ英佛側の武力弱體感にある。そして英佛は聲を大にして國民を警醒しつゝある。徴兵制度を布くなんといふことはイギリスとしては非常な奮發なんです。勿論之はフランスの催促によることは事實です。英佛は今や熱狂的に軍擴に馬力を掛け、それでも尙安心出来ぬと云ふのでソヴェットの武力を抱込み、米國を抱込まんとする。またソヴェットの抱込策に先行してバルチック海から東地中海、黒海に亘る地域、國名で云へばポーランド、ルーマニア、ギリシャ、トルコ等の獨立を保障してやらうと云ふイギリスの申分であるが、自分の足許のロンドン防空さへ覺束ないのに、遙か離れた國々の

獨立を保證してやらうと云ふのをかした話で、今ドイツの空軍にやられたならばロンドンも他の重要都市も完全にやられてしまふといふことをイギリス側は恐れて居る。その英國が、ポーランドに、ドイツと始まつたら俺の方でお前を助けてやるぞ、更に又、長鞭馬腹に及び難き、あのルーマニアやギリシャあたりまで助けると云ふ。——尤もギリシャは海軍で助けやうと云ふのでせうが——之は畢竟小國連を煽て、之を以て自家防衛の堤防とするのである。ところが、ポーランドとの協定にしても、——一體あゝ云ふ風に強國の間に介立し強國勢力の操縦に國運を依存せしめて居ると云ふやうな境涯にある國民と云ふものは外國の勢力が附くといつても鼻ツ柱がバカに強くなる。東洋に於ても、昔の朝鮮、今の支那がそれです。ポーランドも歐洲外交界の輕業師とのニツク・ネームで有名なベツク外相——その外相自身もちよつと持て餘して居るほどに國民が上つてしまつた。

もう英國が付き、フランスが附いて居り、その英佛の後にアメリカが控へて居ると云ふやうな氣分らしい。之を見たイギリスの方では、『まさかポーランドはダンチツヒ問題で深入して其の爲に事端を醸すやうな所までは行きはしまし』と暗に諷諭として居る。その結果がポーランド政府當局も、出来ればドイツと平和の折合をつけるの外はないと云ふ頭に最近はなつてゐるのぢやないかと思はれる。次にソヴェエツトと英佛——といふより、英國とソヴェエツトの交渉ですが、談は始まつて居るが、チェンバレンとかサー・ジョン・サイモンとかいふ眞面目な地味な思想の人達には、此の機になつてもまだ何分ソヴェエツトと公々然と人前で相抱擁する氣分になり兼ねるといつたやうなハニカミがある。ソヴェエツトの方では又色々な掛引があり、どうしても本格的な同盟でなければいかぬと云ふ。東日の布施勝治君の特電には『ソヴェエツトの狙ふ所は、勝つても負けても可いか

ら第二第三の世界戦争を促さうとして居るのだ、ソコに外交方針を置いて居る」と言つて居るが、私も大體同感である。私は布施君を大正初年から知つて居るが、同君は極めて常識的な物の見方をする、ソヴェエツトの狙ひ處は恐らく同君の云ふ通りでせう。同盟を固く主張するのも、畢竟英國の弱點を知つて居るからで、すなはち在野黨及保守黨内の強力なる一部の間に磅礴して居る同盟論を煽り立て、そしてチエンバレンを引摺つてやらうと云ふ趣向なんです。

要するにイギリスは獨伊包圍陣を作るべく今なほ苦心慘澹して居りますが、之は偶々獨伊をして斷然あの通り一元的協同體化せしめた、之は非常に大きな武力ですから、現状ではこの大きな武力に對して英佛の方ではチョッと齒が立たない。

五、英佛空軍の弱勢

先づ空軍の一點から見ますと、今度アメリカ大使になつた英國に於ける外交及帝國政治の一大權威者であるロード・ロシアンが、昨年秋の議會で演説したところに依ると——毎々私が引くところでもあります——英國は空軍勢力に於て、航空機製作能力に於て、又防空施設に於て、此の三者何れに於ても現にドイツの半分か力がない。フランスは獨逸の三分の一だと云ふのです。私のボンヤリした記憶によれば、英國は一九四〇年の春を期して第一線機四千臺を目標として目下空軍を擴充しつつある。ところが其頃にはドイツは六千臺乃至八千臺を持つたらうと云ふのが、昨年秋頃ロード・ロシアン及びラウンド・テーブル・グループの連中の言つたところであります。

昨年秋チエンバレンがヒットラーの山莊に行つてチエツク問題で手詰の談判をした時に、チエンバレンはヒットラーに向つて「あなたの方で、チエツクが言ふことを聽かなければ十月一日にはジューデーランドに兵を入れると言はれるが、それは正しくチエツク侵襲であるから、チエツクの盟邦たるフランスも起ち、ソヴェエツトも起ち、而して俺の方も起つことになる。すなはち、一般戦争になるのだから考へ直してくれないか」と言ふと、ヒットラーは「三百五十萬の同胞を助けて、民族自決をやらせる爲には一般戦争亦敢て辭するところに非ず、」と言つたので、チエンバレンは大いに驚いて、ロンドンに歸つて廟議を練つたが、結局あゝいふ風に、謂ふ所のミュンヘン會議となり、體よく外交的の降参をした、ヒットラーが一般戦争になつても三百五十萬の同胞を助けて民族自決をさせるのだと言つたといふことは、チエンバレン自身が議會に於てサウ言つて居る。之は

絶對的の眞實です。ところが最近アメリカの一雑誌の論文に依ると、あの際ヒットラーはもつとエライことをチエンバレンに言つたとある。蓋しそんなことだつたらうと思ふ、即ちドイツは二十四時間連続して每一時間六十臺づゝの爆撃機をロンドンの空に送り得られるのだと言つた。朝五時に六十臺送り、六時になれば又別の六十臺といふふうに変更して、二十四時間ヒツキリなしに六十臺の爆撃機をロンドンの空に送り得られる。之にはチエンバレンも怦^たまげてしまつたとある。此の論文によると飛行機製造能力から言つても、ドイツは一ヶ月に——數字は今チヨツと私の記憶が間違つて居るかも知れませんが——千四百臺乃至千八百臺。然るに、英國の製造能力は其の半分にも足らない。——たしか英國は四百臺とあつたと記憶する。——フランスに至つてはお話にならぬ。一ヶ月に七十何臺しか出来ない」とある。今日は先年の世界戦争の時とは違つて、移動性ある武力は

海軍とは限らない、否寧ろ飛行機です。空軍です。イギリスは過去に於て、強大な海軍を有つてゐる限り、陸軍の必要なく、ナポレオン一世ですら英吉利に侵入を敢てし得なかつたのでありますが、今日に於ては、海軍の地位に取つて代つたのは空軍ですから、外交断絶を俟たずに、最後通牒と同時に、或は皮肉な西洋の記者共の言ふ日支事變の如く、外交關係は其の儘にして置いてイキナリ空軍を放つ。イキナリやる時には、今日の獨英空軍の對比勢力を以つてしては先づロンドンがやられる、英國側は戦争の劈頭に非常な打撃を受ける譯だ。之は至つて

決

して嚇かすのではない、常識の示唆する教訓である。現に日露開戦のあの時に我が驅逐艦隊が、何隻行つたのか知らぬが二月八日の晩、旅順を夜襲に露國艦隊の主もな數艦即ちバルラダ、アスコリツド、レトウイザン等に效果的雷撃を加へ、

この一舉に依つて日本は開戦と同時に忽ち制海權を取つてしまつた。若しもあの事實が現はれる前に、驅逐艦隊を一ダースばかりやつて旅順の主もな敵艦を三艘か四艘やつつけてしまへば數週間後には鴨綠江方面は勿論のこと、金洲灣で陸兵を上陸させ得ると云ふことを豫言するものがあつたら、恐らく氣違ひ扱ひをされたらう。英國があれ程ドイツを怖がつて居るところを見ると、戦火一度破裂すれば、英佛の重要都市は必ず先づ獨逸空軍の徹底的空爆を受けるのであらうことは想像され得る。しかも日支事變に於ける日本の如く、第三國の權益を曲藝的に避けつゝやるなどと云ふ遠慮はドイツはしない。頭から一時間毎に六十臺の爆撃機が行く、二十四時間連續的にロンドンをやつつける。軍事的施設だけをやつてもどうせイギリス側では、無差別的爆撃をやつたと言ふに決まつてゐるのだから、頭から其の積りでやるだらう。イギリスの方でも其の邊覺悟のことでロンドンの

各公園には防空壕を造り、市民には瓦斯マスクを配給し、小學兒童や病人をロンドンから避難させる設備が出来て、今ではドイツの病人、兒童を撤退させる設備よりもイギリスのそれが一步進んで完全に出来て居ると言つて喜んで居る。また最近は鋼^{スチール}で造つた——あれは防空壕ぢやないでせう、あれに入つてしまふ。坊さんが入つて見たり、色々やつてゐる。

六、英國外交の敗退

だからヨーロッパは、武力優越なるドイツに對して、ソヴィエツト並びにアメリカが入つてくれても英佛は今すぐのところ戦争は出来まい。それを見て居るから小國連は、ポーランドにしても、トルコにしても、ギリシヤにしても、ルーマニヤにしても、獨立保障には一應は應ずるが、併しそれで安心しない。況んや、

ポーランドなり、ルーマニアがやられた時にソヴィエツトがドコまで助けるかは未定事項です。更に布施君アタリの觀察の如く世界戦争を誘發させるソヴィエツトの國策から云へば、さう有效な援助を與へる力も無いだらうが、與へて早く戦争を濟ませてはいけないから、この戦争を成るべく慘澹たらしめるでせう。サウイフ譯で、今のところは、獨伊樞軸に對する英佛の立場があまりにも弱いが故に、獨伊包圍陣作成を目指す英國の外交戦は、まだ成功しない。低迷し、ジグザグを行く。そして寧ろ其の外交戦のイニシエータをソヴィエツトに取られて居る形である。サウイフ状態であるから、私は一ヶ月前とは違つて、差當り目前の現實としては歐洲は先づ戦争の低氣壓は去つた。去つたとは何を意味するかと言へば、英國外交の失敗である。なぜ失敗したかと云へば、竟畢武力の不足を外交に依り補はふとする、即ち他人を煽て、他國の兵力に依つてやらうとしたのだ、

英國として已むを得ないことなのでせうが、イギリスが現前の歐洲外交戰に於て失敗して居る理由はソコにあると思ふ。英國の恃むところは金力であるが、小國連は金力よりは實力の方を喜ぶ。金を貰つても、それでダンチツヒ自由市やポーランド廻廊の解決は出來ない。サウイふヨーロッパの情勢であります。

七、政權維持策としての米國外交

アメリカの方は、大分國論がルーズヴェルト政權の政策に對して考へ直すと云ふこともあるのではないのですか？この一ヶ月以來あまりサウイふ方を勉強する暇がありませんが、併し本質的には判つて居る。

次の大統領選舉に、ルーズヴェルトが、從來の傳統を破つて三回目立候補をするや否や。やらないとすればデモクラット派に果してルーズヴェルトのニュー

ディール政策を繼續すべき且つ繼續しながらデモクラットの政權を維持し得るが如き恰好なる有力候補者ありや否や。無ければルーズヴェルト自身が飛出すかも知れない。それは先生まだ自分で思案も決まつて居るまい。

結局、ル氏就職以來あれだけの金を使つて、失業救済やら色々な事業をやつて居るけれども、大體に於て一千萬乃至一千數百萬の失業群は依然として現存して、國家の負擔となつて居る譯です。サウいふ状態に於て、ロシアの共產黨大會に於ける報告を見ても、アメリカの共產黨員が昨年中に二倍にもなつて居るといふし、随分共產黨の活躍も想像し得られる。第一、労働聯盟の古い方のグリーンでなく、新しい方のルイス、あれは極端な左のやうです。ルーズヴェルトさんも選舉の投票は頗る左の方に依存して居る。だから米國の國情は、日本の多數の人が考へて居るやうにインフワリブルな金城鐵壁ではなく、實は随分脆弱なところがある。

弱いところがあるから、世界戦争でも煽つてみたい。

之は私が先見の明を誇る譯ではありません。秋月左都夫先輩が會つて私に言はれたことがある。私は昭和八年に大阪で全國電気業者の集會に於て、講演中、ルーズヴェルトのニューデイルなるものは、極く好意的に同情を以つて批評しても、成功率失敗率各五〇%だらう、その五〇%のバランスは失敗の方に六十なり七十なりに傾くやうになつたとすれば、ルーズヴェルトは必ず人心轉換を外政に求めるぞ、と述べたことがある。その時分はヨーロッパは今のやうな騒ぎではありませぬ。外政と云へば、米國海軍の状態を見ても、ドウしても日本を膺懲すると云ふことである。殊にあのステムスン・ドクトリンなるものがある、之はルーズヴェルトがチャンと引繼を受けて居る。さなくとも非常に大きな海軍を拵へて日本を嚇しつける。サウ云ふ態度にアメリカが出て來ると我々は見なければなら

ぬぞ、と私は言つたのです。丁度その頃であつたと思ふが、秋月老先輩が私に手紙を寄せて、『アメリカの不景氣々々と云ふが、アメリカの經濟生活の病症は、生産の方面に非ずして分配の方面にある。分配の方に病氣があるのだから、之を直すにはいくさをすれば可い。世の中にいくさ程大きな分配はない。だからヒョツとしたらアメリカはサウ出はせぬかと思ふが、君はドウ思ふか』と訊かれた、私は、老先輩の達見の通りに私も考へますと御返事をしたのですが、今日の狀況は正にそれです。

八、兩陣營の對立

既に申し述べたやうな次第であつて、日本ではヨーロッパ戦争乃至世界戦争は獨伊が煽つて居るのだと云ふイギリスの通信その儘が先入主になつて居るやうで

すが、獨伊は焉ぞ戦を用ひんやです。今までのところ、或は鎧袖一觸とも考へて居るだらう。この獨伊よりは英佛の方が戦争的心理により強く制されて居る。自力でバランスが取れないから、ソヴィエットを呼び入れ、米國の聲援を求めて居る。また米國は米國で今言つたやうな對内的の事情がある、サウ云ふ譯で、戦火を煽る者は寧ろ謂はゆる民主グループの側にある。

それから今度は兩方の對立せる空氣である。此の頃英國側で言つて居る、一應尤もに聞える議論は、『例へばオーストリーの如き、或はダンチツヒもサウなりませが、ヒットラーがヴェルサイユ條約で生木を割かれたやうにされたドイツ民族を一つの國家に纏めようと云ふのは無理ではない。武力を背景として獨斷擅行を以て隣國をあゝやるのは感心しないが、本質的には彼の言ふことは正しい、だから今まで我慢をして居つたのであるが、本年三月チエツクを一晚で併合してしま

つたのは、之は例へば昨年九月のジュデーテンランドの問題とは反對に民族他決である。即ち世界制覇の志の現はれであるから我々は排撃せざるを得ない、正に二十世紀のナポレオンだ』といふにある。さういふ對獨觀だから獨伊包圍を目的とする「反侵略陣」を作らうと、先づ大國以外で一番武力を持つて居るポーランドに呼び掛けたのである。實はイギリス人の多くは感情的にヒットラーのドイツと英國とは親善が出来るかと云ふ謬れる頭でズツと來て居つた、一昨年暮あたりまでは確かにサウいふ感情で來た。私は、ドイツが偉くなればイギリスは必ずドイツを目標として外交をやるぞと考へて、人にも始終言つて居たのです。併しヒットラーは、まだ／＼當分イギリスを抱込みながらドイツの國策を行ひ得ると思つて居つた。もう此頃はヒットラーもハツキリ判つた筈です。殊に、米國大統領の、えらい諷刺的な甚しき誹謗的の演説、或は英國議會に於て、前海軍大臣タフ、

クーパーがヒットラーを目して、偽證犯人、文書偽造者と罵つた、之は形容ですが、「あの謀判をする奴、あの嘘つき、あんな者との約束が當てになるか」と、假にも一國の元首を促へてニセ判を使ふ奴だ、偽證する奴だと罵られるに至つて、さすがのヒットラーもカン／＼になつて居る。今日では兩方とも感情が非常に昂ぶつて居つて、到底この儘では英獨は並び立つことが出来ぬ。

チェンバレンさんが始めて政權を執つた時には、イーデン外交の行過ぎを改めて、なにがさて世界的大國としての英國の安全を恢復しなければならぬ。イギリスは英本國だけでは世帯が持てない。毎々申す通り、食糧原料のストックは三週間、最上の状況下に於ても七週間ぐらゐるしかない。しかも印度にしても、濠洲にしても、ニューチランドにしても、英國から見れば日本武力の制壓下に在る。端的に云へば、チェンバレンなどの頭では、ブリタイッシュ・エンパイヤを現實に

脅威してゐるものは日本である。之は物事の本質上サウであるのであつて、日本が野心があるとかないとかサウ云ふ問題ではない。水と油だ。

だからヨーロッパに於ては先づ地中海の通路をあげるために英伊協商をやる。ムッソリニ曰く、イタリーは恰も地中海に圍まれて居る島だ。然るにこの地中海の入口も出口もイギリスに支配されてゐるから、我々は呼吸の自由すらないと云ふ譯だ、英國にとつては地中海は東洋に行く幾筋の通路の一つの近道に過ぎないではないかと。之に對してイーデン曰く、サウでない。英帝國の大動脈だと。之は兩方とも眞理です。ソコでお互に地中海の通航を脅威する意志を持たぬと云ふことは、英伊協定の指導原理になり、條約の明文にもハッキリさう書いてある。條約に詳しく、出入口通過共にお互に脅威する意圖を持たぬとある、だから英國がイタリーに求めるところは、地中海の自由通航をお互に尊重しようぢやな

いかと云ふ點にある。地中海の通路を安全化しなければ、英國が印度に對し、濠洲に對し、いと云ふ時に海軍をやる譯に參らぬ。

ソコに防共協定に於ける日伊關係の價値があると私は思ふ、私夙に、ドイツとは兎も角、日伊間には海軍協定があつて可い、その海軍協定とは、コッチから地中海に出しやばると云ふのではない、日本は西太平洋を抑へて居る。西太平洋の海權は、英帝國を構成する尨大なる數個の領土を支配する。之に當然英國海軍は願慮を拂はなければならぬ。茲に於て地中海はイタリアが比較的弱勢海軍を持つて居つても、或る種の輕軍艦、潜水艦及び空軍等を以て英國海軍を地中海で牽制出来る譯です。日本も亦、エチオピア問題當時の情勢が地中海に繼續する限り、必ずしも數量的に英國の海軍と同じものを造らないでも、優に印度洋の大部分と西太平洋を我が制壓下に置くことが出来る。斯くしていくさにはならぬから、イ

タリーも日本も共に合法的合理的な民族的慾望を英國に對して押付けることも出来る。

九、日本と英國の立場

話が偶然脇道に入りましたが、チエンパレンは先づイタリアを抱込む、それから當時公言した如く、「西ヨーロッパ四大國英佛獨伊の仲直りと云ひますか、四大國の關係を平和化する。之が何より急務だ」と云つたものです。だから私は當時書いたものでも講演でも言つた通り、チエンパレン政策の指標は西歐四大國の和協にあつたのです。當面こゝに三四年の間なりとも、よく支那の歴史にある如く一時天下を僞定する。西歐四國の關係を當分暫くの間だけでも平和化し、即ちヨーロッパを僞定し、以て折角拵へたシンガポール根據地に世界一流根據地としての

實を與へる。實を與へるとは何ぞや、即ち日本國特に日本海軍の好意若しくは遠慮に依存して居る英帝國海外領土の大部分に對して、英國自ら實力を以て護り得る地位に立つやうにすることなんです。

英帝國海外領土と本國との關係を絶たれたら、英國は第二のスペイン、第二のオランダになることは明白である。之は英國人の誰もが知つて居る。サウイふ譯で、英國と日本との關係は丁度イタリアが地中海に對する大國としての自主權を拋棄せざる限り恐らく英國との間に本當の握手をする氣にならないだらう如くに、世界に於ける日英關係は、英國があつた現狀に執着する限り、日本の文明人種としての當然の發展を抑制する限り——ソレは現に抑制して居る、即ち移民入國の禁止、之は我々三十年來我慢して居るが、今度は日本の品物の輸出、それはハイムリフ・ライセンシシステム・フォードシステム輸入特許制・輸入割當制といふ制度で今輸出を喰はせて居る。之等が高率關稅

續く限り、日本が自ら首を縊ることを覺悟せざる以上、本當の日英親善は出來ない。之はお互に知つて居なければならぬ。イギリスはその點の認識の上に立つて國策をやつてゐる。即ち支那に對してあれだけ力を入れたのも、日本の北に對し南に對し西に對する發展を抑へようとするのも、之は毎々私が申す通り又皆様の多數が御同感の次第でありませう。

日本獨自の民族的欲求、また其の當然の發展が、如何にアングロサクソン就中イギリスとの關係をコウいふ現狀にしたか、將又イギリス人自身は何と言つてゐるか、私の東日紙上に連載した論文に擧げた或る一人の廣言の如きは、ホンの斷簡零墨のものに過ぎないのです。吾人はどうしても日本と兩立せぬ、それは何も日本がデモクラシーではないからと云ふのではない。日本がファツショでないこともアナーキーでないことも共產主義でないことも知つて居る。けれども日本

は現状修正國であり、我々は現状で満足して居るのだ。日本の國策は現状打破ではないか。その國策の現はれは當然に、我々の持つてゐるものを損傷しようとするのだが、それは不可。之に反してソヴェットは、彼の領土に満足し、彼の資源に満足し、他人のものを欲しがらぬのだから、我々と同じ立場だと。之は我輩の舊方でありタイムス主筆今は罷めて二十年後の今日でも依然としてなほ世界的權威であるウィツカム、ステイードのタイムスへの投書であります。サウイム譯だから、日本は外交上の基本的事實だけは認識して掛からなければならぬ。

斯くの如く彼等自ら日獨伊は現状打破の音頭取だ、否ソレでなければ日獨伊は窒息するの外ないのでと認めて居るのだから、世界政局に於ける日本の立場は何處に在るかは言はずして明瞭です。日本が獨伊の陣營にあることは、之は現實であり、相手方もサウ決めて、我に對する外交經濟軍事に亘る壓迫をアメリカがや

り、英國もやつて居る。この事實は好ましくないことでせう。我々も好まぬ。併しながら好ましくないからと云つて、この事實に對し敢て耳を塞ぎ目を閉ぢて、我を假想敵とし、我を經濟戰の對象とし、我を外交戰の對象としてやつて居る國の御機嫌を、この支那事變の最中に於てすら取らうと云ふことは、出來ない夢を見て居るのである。(拍手)ソコをハッキリと認めなければならぬ。(拍手)男らしい外交をやらなければならぬ。

一〇、我が對英米外交の實情

英米には双向ひませぬとか、英米と日本の間には外交上妥結の出來ない問題はありませんとか、臆面もなく先方に言ふ。併し先方はサウ考へて居らぬ。コッチが言ふことは、向ふから見ると、また人を騙しに來やがると取るに過ぎない。ソ

レはこつちの言ふ態度が、日本の本來の立場、環境、民族生活の必要の命ずる國策とそぐはない嘘のことです。嘘と云ふものは必らず漏れる。

新聞に依ると、米國大使が歸る時に、

その第一は、日米間には外交手段で解決出来ない問題はないと。それから支那新秩序、極東新秩序の設定はコッ云ふ譯だから、之は是非アメリカの同意を得たいと云つたとある。極東新秩序なんと云ふからアメリカは承知しない。極東新秩序の設定を外交手段でアメリカに認めさせるといふことは不可能事である。ソレを執拗に言ふことはお前さんの方で降参なさいと云ふことになる。ところがソレは、ルーズヴェルトが政權を執つた時に、前任の大統領ブーザー並にスチムスンとの間にチャント引繼事項がある。それは三點になつて居る。第一點は條約の神聖

を擁護すると云ふ政策は繼ぐと極めて抽象的な表現になつて居るのであります。それは即ちスチムスン・ドクトリンを意味するのです。第二點としてヨーロッパの紛争には成るべく掛り合はぬやうにする。それから第三點は「日本から色色ヂエスチユアが來てもソレに對しては掛り合はない、極めて冷感な態度を執ると云ふ」ことなんです。この三點は當時チャントアメリカの雑誌にも書籍にも出て居る。ソレであるのに今頃相變らず廣田ハル・メッセーシの文句を繰り返して居る。アメリカに云はすれば、あのヒットラー、ムッソリニに對する大統領のメッセーシにもある「極東に於ては或る國の領土の廣大なる部分が他の一國の占領するところとなれり」とのあれを正當事として承認して呉れ、と云ふことになる。とアメリカの方で考へる。又外交上調整出来ない問題はありませんかとアメリカ側では云

現前の時局と我が外交對策

ふところなんです。現に言つてゐる。コッチが何を言つても相手にしない。

齋藤君の遺骨を持つて來て呉れた。之は日米關係打開の基礎と認める、

私は聽かなかつたが、世間でサウ言ふ。アメ

リカから見ると、

ら、ニューヨークの大新聞、タイムスカヘラルドであつたと思ひますが「日本に對する本當のメッセージは、軍艦アストリヤが齎らして居るのではないぞ、大統領の命に依つて今急いで太平洋に廻航しつゝある合衆國艦隊が、日本に對するメッセージを持つて居るのだぞ」と書いて居る。ソレにも拘らず、

一體

我々大和民族はサウいふ卑屈な意氣地なではない筈だ。(拍手)

日露戦役直前、「滿鮮問題解決の目的は萬難を排しても之を貫徹する」と云ふ廟

議が明治三十六年六月二十三日の御前會議で決定せられたのであるが、あの當時の日本の國力でもつてロシヤにブツつかるといふことと比較して考へれば、今日の日本の外交のやつて居る事なんかは、外交でもなんでもない。私は敢て極く率直に斯う申します。

一一、何が故に英米を恐れるか

此間もある所で人に招かれたが、その席にある學者が見へて、各國の正貨準備の比較表を見せて呉れた。アメリカのは之れ位、英國は之れ、フランスは之れ、ドイツは私の小指を半分にした程、日本は之れ、之れをよく御覽にならぬといけませぬと言はれた。私は言つた。ドイツは之ですか、之ばかりの正貨をもつて僅か四五年の間にアレ丈けドエライ軍備を拵へて、まだコンナに莫大の正貨を持つて居

現前の時局と我が外交對策

二四一

るイギリスやフランスをして睦若たらしめて居る。ドイツといふ奴は偉いな」と、私はわざと言つた、わざと言つたのであるが、實はソレが實際の眞理です。

防共協定強化云々の質問

に對し有田外務大臣曰く、獨伊との關係は讀んで字の如く防共協定で、コンメンタルンを目標として居る。之が對コンメンタルン策に對する我が外交の樞軸である。けれども東亞新秩序の建設はこれだけではいけな

る。を意味する。獨伊との關係はドコ迄も防共一點張、ソレ以外には何もありませんと、ソレに對してタイムスの特派員が註釋をして居る。

と云ふことは困る。言ひ換へれば、

だからチエスチュアもいゝ加減にして置かないと、サウいふ風にイツでも先方が踏み付けて来る。

我が國民は可成りの心さだけれどもサウ意氣地なしぢやないから、あまり踏み付けられるとバツト反抗する。サウして非常に意外な事態を來すといふことは從來往々にして、之れを見た事實です。聯盟脱退の如きもソレです。あの時も、聯盟は脱退しませぬと云ふことを、たしか英國大使が、頗る高い地位の人から聽かされた。(又外務省幹部も閑地にある大使連の或部分と共に脱退喰止めの策動をしたことも私自身逢着した事實です)ソレならば大にトツちめてやれと云ふので急に英國が強くなつて、松岡を前に置いてイーデンが、我々は日本に目に物見せてやらなければならぬとみえを切つた。ところがサウ踏み付けられると政府は兎に

尙國民が承知しない。斷然脱退しろと云ふので、政府を引摺つて到頭脱退さしてしまつた。

日露戦争でもサウです。もしも明治三十六年八九月の頃に『ロシアとあゝして談判を開いてゐるが、どうせアレハ纏まらぬのだ、或る段階に行く」と武力でやるのだ』と、コウ眞しやかに誰れかゞ民間に漏らしたとしたら、一番先に桂内閣打倒に掛つたのは恐らく財界であつたらう。處がロシアの方で段々遷延手段を弄する、十月になり、十一月も過ぎ、十二月になつて返事が来てみたら、實にひどい返事ださうだといふことが判るとソコで一番先に奮起して『政府は一體何をしてゐるのだ。之は最早利害得失を超えて國家民族の面目問題だ、コ、まで踏付けられて桂や小村はまだ未練にもロシアの袖を引張つて口説を續けるのか』と云つて、帝國ホテルに近藤廉平、豊川良平等財界の長老が寄つて政府の決斷を促したものだ。

だ。外交は俺等に任せて置けと云ふから、我慢出来る限りは任せて居るが、あまりひどい状況になつて來ると、今度は國民の方で非常な足をかけて反動していく、さうならなうで済むべき事態をすらくさまで持つて行くやうなことになる。だから無事第一主義の外交は却つて國家を大きな國難に追込んで行くものだといふことを御注意願ひたい。

英國がポーランドに向つて、君の所が獨逸から攻撃されて之に抵抗して獨立を危うするが如き危険ある場合には、英國は陸海空の全力を持つて君の所を援護する、獨立保障を與へるぞといふと、ポーランドの外務大臣が、『ソレは御好意有難い。併しポーランドは獨立國である。しかも我々は英國だ、だから相互的にして貰ひたい。英國がドイツに抵抗して獨立を危ふするが如き場合には、ポーランドが英國を助けませう、どうか相互的に願ひたい』と言つた。日本の偉い人から見

るとポーランドの外務大臣などは若僧かも知れないが、日本とは大分行き方が違ふ。然らば之に對してイギリスの方で、ソンの贅澤なことを言ふならば獨立を保障してやらぬぞと言ふかと言へば、決してサウでない。ソレは結構、早速サウ願がふと言ふ。今日はポーランドでさへこれ程の迫力を示すのに、日本のやうな偉い國がソレだけの芝居が打てないでドウするか、(拍手)と申したい。

一一、不遜なる英國の極東外交

英國の外交はヨーロッパに於ては實に慘目なジグザグをやつて居る。ボロ船と云つては惡い少しお婆さんになつた船が氷の中をジグザグやつて居るやうである。然るに極東に於ては、此の英國が、雄姿颯爽と大手を振つて赫々たる成功を收めつゝある。之ほど奇怪な現象は何處にあるかと言ひたい。

厦門の共同租界鼓浪嶼に於て日本の海軍か陸戦隊を揚げると、英國の軍艦がやつて來るし、司令長官が快速力の巡洋艦で北上するし、フランスもやつて來る、アメリカもやつて來る。三國の極東艦隊の精銳を選つて來て、日本海軍に向つて、恰も日本海軍が無法な事をしたかの如き挑戰的態度に敢て出るといふことは決して武力に於て彼等が自信がある故ではない。之はイギリスがドコを狙つて居るかと言へば、巖の如き日本の海軍に卵の如き英國極東艦隊がブツつかつて見ても、巖の方で避けるに違ひないと彼は思つて居る。巖が避けようとしなくとも、

が其の巖をちよつと動かす。強い方で逃げるから喧嘩になりつこないと信じて居る。日本を押へて居るのだと云ふ

自信を彼等は持つて居る。

イギリスの今の外交は、スターリング・ダイプロマシー、即ち磅外交である。

チエツクを滅したのも、實は此の磅外交だ。チエツクとしては、小國か大國に仕へる道を執るより仕方がない。ドイツと親善で行かうと云ふので、ドイツの註文通り共産黨も禁止する。ユダヤ人排斥の立法行政の處分もやり、甚だしきは内務大臣某將軍はソヴェットと因縁があると云ふので之を讖にする。汲々としてドイツに仕へて、先づ後日の時機を待たうとした。之は小國としてアの場合賢明なるヤリ方である。然るに英國の方では「まるでチエツクはドイツの屬國になりつゝある。この儘にして置けばドイツはアレからルーマニアの石油を狙つて東進する。或はダニュープを通つて昔の東漸政策を實現する。之はドウしてもチエツクに少しつつかい棒をしなければならぬ」とあつて、他に方法がないから金を貸さうと、初めチエツクは三千萬磅を請ふたのだが、イギリスは、俺の方は一千万磅出さう。あとはフランスにも心配させると云つた。之はリースロスの幣制改革を見るやう

である。金で人の仕事の邪魔をする。ルーマニアに貿易長官ボヂソンを派して通商協定をしようとしたのも、イギリスの特むところは金の力である。イタリイに對しても、何とか折合を付けて呉れば君の方の必要なクレディットは心配するからと、政府は言はないけれども、ロンドン財界や新聞紙上やらで非公式に言つて居る。

日本にもサウ云ふ臭ひは紛々として來て居るだらうと思ふ。揚子江を開放すれば俺達もクレディットを何とか骨折つて見ようと言つて居るらしくもある。サウでなければ揚子江開放論が

今日の狀

況に於て揚子江を開放して御覽なさい。揚子江の兩側は無限に擴大されたる上海の共同租界化する、そして我が軍はテロ團とゲリラ軍の中に非常に苦闘をしなければならぬことになる虞れがある。だから揚子江開放論は我が忠勇なる皇軍を背

後から刺さうとする實に恠しからぬ妄論である。

一三、速かに交戦權を發動せよ

但し英國等に於て帝國の交戦權を尊重するといふならば、我輩も亦揚子江開放論に異存はない。帝國の交戦權を今以つて否定して居る英米佛に向つて此の際揚子江を開放する、ソシな馬鹿なことがドコにありますか。上海の共同租界だつて或る時間以後には日本人が一人で入ると危険だと聞く、況んや、例へば 〇の城外一步出れば

を占領して居るのだと旺兆銘も評したとか云ふやうな状況に於て揚子江を開放すれば、第三國の船が横行する。第三國の船即ち支那の船であると言ふことは、支那に在動した者ならば皆知つて居る事實である、第三國の權益を尊

重するなどと云ふから支那人はいゝ氣になつて、イギリスの旗やアメリカの旗を使つてこの積荷はイギリスのもの、この船もイギリスのものと言ふことになる、日本の軍艦こそいゝ面の皮で、その前を禁制品を積んで堂々と行くのを見ながら手が着けられない、厦門事件などもそんな事から來て居る。

だから揚子江開放も可いが、帝國は國際法上當然の權能たる交戦權を主張勵行しなければいけない。航行の船舶には我海軍は臨檢捜査をする。戦時禁制品を運び、また運ぶ疑がある船舶は拿捕して捕獲審檢所に送る——宜しく上海に捕獲審檢所を拵へるべし。スペインのフランコ政権のように見付け次第爆沈などは弱いものゝする事だ。實力ある帝國海軍は宜しく堂々とこうした拿捕船を引張つて來て合法的に處置すべきである、コウいふのであれば揚子江開放は御やりになつてよろしい。今日のやうに我れは正しい戦争をして居るのだと云ふ建前で行きなが

ら、敢て當然の權能を運用せず、居るのは戦争を長期化し、第三國との關係を複雑化し、險惡化する所以である、揚子江開放ぐらゐの事では、云ふに至つては、談焉を容易なると言ひたい。

私は今揚子江開放を言ふ人達に向つて、敢て言ふ、諸君はサウ言ふ政策を持つてゐるならば、何が故に揚子江に於ける陸海軍の作戰に對して初めから争はなかつたか、お仲間には有力なる〇〇の一人や二人はあつたらうから、何が故に〇〇を攻略する帝國の作戰に對して〇〇に於て苦情を仰しやらなかつたか。何が故に

に軍事行動をする時に文句を仰しやらない、何が故に

の行政管轄に編入するのを黙つて見て御いになるか、斯の如くにして揚子江を開放せよだの、英國の御機嫌を直ほせだのと云ふのは、議論としても筋道が立たない。

此の頃のお爺さん——我輩もお爺さんかも知れないが我輩のような閑人は別として、お忙しいお爺さん方は本などは一向お讀みにならぬようだ。甚だしきは自身が歐米の新聞雑誌の上でドンな風に取扱はれてゐるかも知存じがない。例へば海南島に付いては一昨年夏事變發生當時、同島は香港・シンガポールの交通の死命を制する要衝であるから、如何なる事情の下にても、日本が之を占領することは絶対に相成らぬと云ふことを今のうちに日本政府に言つて置け。コウいふ議論が一昨年九月のラウンド・テーブル誌に出て居る。また其の前に、日本が滿洲に於てやつた如き事を臺灣から南に向つて海軍の實力を以てやるかも知れぬが、サウいふ場合にはイギリス一國の問題ぢやない、フランス、アメリカ、オランダの問題だ、茲に於てシンガポールの要塞なり根據地の意味は、單に英國のナシヨナルデフェンスだけではないぞ、と云ふことも是亦數年前の同誌に書かれて居る。

私は揚子江作戰を勿論必要とし、殊に海南島、廣東を早くやつて貰ひたいと熱叫した一人である。その理由は、『日本が文明の一大民族としての國民經濟を營む、端的に云へば我々が生きて行く爲には、自己の主權下若しくは勢力下に熱帶資源を有たずして、熱帶資源に關しては我と利害を全然異にし、我を抑へむとする他國に依存して居るような現在の狀況の於ては、八千萬を算する我が大和民族の經濟生活の明日が保障されない。日本は北に向つては明治以來の行掛り、及び國防の見地から北に向つては日本の護りを固くせねばならないと同時に、文化・經濟の兩觀點より大和民族の將來を考ふるに於てドウしても南方發展を忘れてはならぬ。世間の一部は日本は北に向つて進む。南はドウでも可いとか、甚だしきは、などは棄てても可いと云ふ極端な議論もあるさうだが、抑々民族が南に背を向けて北に向つて伸びようと云ふことは生物學の原則に反する。樹は太陽に向

つて南と東の枝が張るではないか、ロシアが建國以來、暖き海へ〜と言つて、あの通りダーゲネルスに出むとし、ベルシヤ灣に出むとし、渤海灣頭に出むとして來たのも、謂はゞ生物の本能である。歴史を緝いても、民族は概む北から南に向つて發展を遂げて居る。然るに日本のみが南に背を向けよと云ふのであるか？北はロシアの南下を防ぐ國防上重大の關鍵であると同時に、民族發展の自然の進路である南を我れに對して塞いで居る國ありとすれば、場合に依りては腕づくでも之を排除しなければならぬ』と信するのであります。

一四、戦争をしてゐるといふ事實を先づ自ら認めよ

話が長分長くなりましたが、今この時期に於てお互に胸に手を置いて篤と考へなければならぬ、點があると思ふ。司會者一宮君は、事變既に三年と仰しやつた、

まだ實は二年にも足らぬのですが、併し一宮君の如き識者ですら三年と感ずる程に此の事變が長くなつて居ると云ふ所に我々は留意しなければならぬ。私は茲に敢て、日本は國家として自らが今やつて居る一大事實を忘却して居るのではないかと申したい。何を忘れて居るかと申すと、日本は今戦争をして居るのだ。その戦争たるや、日露戦争に數十倍する大戦争である。世界歴史に徴しても、過般のヨーロッパ戦争に次いでの大戦争である、しかもアレは世界二十何ヶ國でやつたのであるが、今は日本一國でコンナドエライ戦争をして居る、コウいふ大きな戦争をして居るのに、戦争で御座なく候と敢て世界に證文を入れて居ると云ふことは何たる状況であるか。

所謂「事變」の初期に之を戦争でなく事變だとして取扱ふことにしたのは私は必ずしも咎めない。實は私自身は初めから、今度は全面的日支戦争だぞと叱咤怒

號したのですが、政治方面の人や一般國民は一時的若くは局部的の、或は一時俾且つ局部的の事變と見た。ソレをここで私は罵倒はしませぬ。併しながらモウ今日となりてはこれを事變など考へて居る人は恐らく一人もないでせう、事變とは読んで字の如く、數ヶ月で終了し得ると云ふ期待が前提となるものであります。義和團事變の如きである。事變だとすれば第三國との摩擦も出来る限り少くするを旨とする——また旨とし得る。殊に

あの際に日本が、宣

戦布告でもすれば、或は戦争だぞと言へば、米國大統領は嫌でも應でも中立法を發動させなければならぬ。中立法が發動された場合の方が、發動されない場合よりも、

ヨリ困難を見るだらうと見るのは常識である、だから事件が四五ヶ月で済むのならば、多少の損害や出費がかゝつても、事變の取扱

ひで済ませた方が可い。サウいふ意味から事變の取扱ひをすることになつたものだらうと思ふ。

私は其の當時、軍部の脇道には居るけれども、現役の有力なる某大將からも相互の知友を介して意見を求められたから、「あなたのいふ宣戦論で廟議をつゝいたら内閣の屋臺骨がグラつく。今は何人も悪感情を持たない近衛さんの内閣が折角出来て居る、唯今の此の段階で宣戦布告しろといふのは、近衛さんに荷が勝ち過ぎる、だから宣戦論は見合せてソレよりは、あなたの方で支那沿岸封鎖でもやらせて貰ひたい」と、人を介して言つたのです。中立法があるから宣戦論などは輕々しく言へないのみならず、政府内外の情勢では、出兵したことすら國民に申譯ないといふ氣持すらドコかに伏在して居るとすら見受けられたのだから、宣戦論などと言つても野暮だ、それよりは早く南京を落すように、沿岸封鎖を早く海軍

に頼んでくれと言つたのでしたが、二十何ヶ月後の今日では最早や事態が本質的に一變して居る。

今日は、先程一宮君が言はれた如く、蒋介石は逃げ廻つて居つて、いつ參るのか判らぬ。一體誰が蒋介石の續戦力を與へて居るのだ？ 言ふまでもなく英米佛蘇である。この外援を絶たずして蒋介石を參らさうと云ふことは出来ない。外援を絶つには我が交戦權を、國際法の許す最極度まで此の際徹底的に勵行するの外はない。交戦權を使用せずして單に事變だ／＼と言つてゐるのは、自らの目を塞ぎ手を縛つて擊劍をやつて居るようなものである。之では無限に長期戦になる。ソレが又支那としては勿論、英米も初めからサウ云ふプログラムを以て我らのぞんであるのだ。そのことを私は東日紙上の拙論で文獻を以て引證して居る。妙なことを言ふやうだが、あの論文を見て一番閉口してゐるのは恐らく英國側の

人々だらうと思ふ。本多さんの感情論だとか獨斷論だとか彼等が言ひさうな所は一々英國の權威者の書いたもので立證してある。まさか、英国外務省の前情報部長が氣違ひだとは言へまい。ウィツカム・スチートやイーデン前外相が無責任の放言をしたのだとも、英國側の人々が申されまいと思ふ。

日本國民としてこの際ドウしても考へなければならぬ。即ち私はドウしても政府に於て交戦權を徹底的に用ひることに廟議を決めて、速に、今晚からでも實行して貰ひたい。交戦權を徹底的に用ひるならば揚子江を開放しても一向構はぬ。

一五、交戦權發動と租界問題解決

然らば交戦權の運用に廟議決定として之が實行するには如何にせば可なるかと云ふに、問題は至つて簡單です。先づドウいふ手続きでやるか事務的の話になり

ますが、帝國政府は政府の決定方針を此際列國に示せば好い、公文でも可いし、總理大臣が演説しても可いし、或は廟議決定に基き大本營から軍令を出して世間に知らせても可い。一番適當なのは公文で通牒することだらうと思ふ、先づ其公文の趣旨は大體斯ふ云ふ風になるべきだらう、即ち「支那に對する交戦を行ふに方り、帝國政府は第三國人に及ぶことあるべき不便乃至損害を、可及的最少限度に止めたる願念から國際法上當然に許されある交戦權の運用に著大の自制を加へて以て今日に及べり。然るに今日までの経過に鑑みるに此の自制的態度を此上際限なく繼續することは、徒に戦争を永續化し、交戦地域居住の支那民人の福祉を願念するに於て忍びざるもののみならず、東亞に於ける正常状態の恢復を無限に遅延せしむるに於て、列國の商業上の利益にも不利の影響を及すは瞭然たり、帝國政府は叙上の見地に基き、今日以後——フランス語ではデザ、ブレザン

と云ふ言葉がある。——斷然方針を一變し軍事行動の遂行に當り、最大限度まで交戦國としての當然の權能を運用するに決した。此旨通牒す」と云ふことになるだらう。帝國政府の方針斯く決定の結果は今日まで行はれ居る沿岸封鎖は國際法に所謂實力封鎖となり、此封鎖線に進入する船舶は封鎖破壊者として我海軍艦船の拿捕を免れない。又第三國より支那に航行し又は支那を結局の仕向地とする貨物を搭載する船舶は當然我が軍艦の臨檢搜查、拿捕を免れない。之で海上より所謂援蔣軍需物資は斷然杜絶することとなる。陸上に於ては所謂租界は本來に於て中立性の無いものであるから、——租界と雖も支那の領土主權下にある。之は疑ひないのです——所謂租界居留地をも含めて我が占領地域の行政は、帝國占領の繼續する時間内は我が占領軍の權威下に置かれることとなり、所謂租界問題は自然解消となるのです。

即ち交戦權發動の結果は、陸上は之で租界問題が無くなつてしまふ。上海租界の如きは、交戦權といふ寶刀を始めから敢て抽出の中に入れて用ひずに居るか、アンな事になる、上海の租界のことにしろ、厦門の租界のことにしろ、所謂租界問題に對して、現在我方の執つて居るアの方針は、絶對に誤れる、愚かなる方針だといふことを指摘して置きたい。租界なるものを我が占領軍の權威下に置かさへすれば可いのだ。然るにソレをせずして、上海工部局に向つて、日本人警察官を何十人入れるの、日本人の參事會員を幾人増せのと、要求するのはドウ云ふ考へであるか？ 近衛聲明には東亞新秩序建設と云ふものの御講釋はあまりハツキリなかつたが、併しアレに關聯して、租界は結局撤收させるのだ、と云つて居るではないか。即ち支那をして半殖民地的ステータスから現代式獨立國家の格式に上らせてやる。従つて租界及び治外法權は撤收する。と斯ふいふことなの

だ。平沼總理も議會に於て其の意味を説明して居られるのである。その日本政府が、國際法上、交戦國として當然運用すべき權利を全く運用せず、却つて工部局に向つても少し俺の方の警察官を採れの、俺の方の參事會員を増せだのと云つて居る。警察官を全部日本人にして見たつて、夫れ等日本人は工部局の使用人に過ぎないぢやないか、即ち斯くの如きは租界行政の永續性を前提としてのみ始めて爲し得べき要求である。先方より云はすれば租界行政組織内の之等修正は、正當時に平和の談判に依つて協議すべき事項だ、之れを日本は武力を背景として泥繩的に無理な要求を敢てすると云ふことになる。之は日本は必ず負ける立場に己れを置いて居るのだから英米から排撃されて其の儘になると私は云つて居たのが、果然アメリカもイギリスも、今日の如き變態時期にコンな問題を探り上げる譯には參らぬと拒絶して來た。ソんな事すら前以て見透しがつかないでドウ

するかと申したい。あゝいふ卑屈な要求たる、支那人から見れば、な〜んだ、居留地を取返してやると云ひながら、租界工部局に向つては、もつと俺に權利を寄越せと言つて居る。日本はコウ云ふインチキをやる不都合な國だ、と云ふことになる、信を我が親愛なる支那人に失するのみならず、列國からは輕侮を招く、堂々と勝つべき訴訟事件を下手糞な辯護士に頼んだようなもので、先づ始めの抗辯からして見當を間違へて居る。

之をどうしてコウいふふうには扱はないのか、即ち我が占領地域内にある外國租界は當然之を我が占領軍の權威の下に置く。租界行政組織は敢て變更しないと同時軍の利益のため必要と認めらるゝ場合には、軍は租界行政機構（即ち所謂工部局）の命令、處分を停止し、或は積極的に軍より一定の處分又は命令の發動を命ずることが出来る。但し之は占領より生ずる當然の事態であり而も占領繼續中

のことであるから、列強に於てコウした交戦権の發動に異存をいふべき限りでない。要は日本自らが戦争をして居ると云ふ事實を自ら肯定して當然の權能を發揮すればよろしいのだ。

一六、不可解なる在留外國人待遇

もう一つ國內情勢から言つて、一體戦時體制々々々とエラく騒ぐが、成程それは帝國內に居住する帝國臣民に對しては戦時體制が行はれて居るが、併し帝國內に居住する外國人に對しては必ずしも戦時體制が及んで居らないではないか、現に之だけの大戦争をしながら、外國人に對する信書の檢閲をやつて居らない。外國の通信員、外國の記者等に對して其の通信の檢閲も行つて居ないらしい。行はれて居るならば、今こそ日本に經濟制裁を行ふべき時期が到來したなど、暗に

ちや、やりなさいと云ふやうな意味の特電が、堂々と日本の郵便局から發電されてあちらの新聞に出る譯がない。日本人だけは、

我々日本人或は一死報國の子弟を

大陸の戦野に送つて居る遺家族の日本人を、

帝國の興亡浮沈に關する此の大戦争

をやつて居ると云ふ嚴然たる事實を我敵國及び中立國との關係に於て敢て肯定しようとしてもしない今日のやうな遣方を續けて居つて可のかと云ふのである。

一七、經濟制裁は絶対不可能なり

之に對する反對論として強ひて想像すれば、ソんなことをなされれば、經濟制裁

現前の時局と我が外交對策

——と云ふか、壓迫と云ふか、臨機應變に色々用語が替りませう。——を喰ふぞといふ聲に、ソレハ大變だと忖える。實に馬鹿な話です。抑も、經濟制裁とは何を意味するか？ エチオピア問題でイギリスが聯盟五十ヶ國を煽て、聯盟の決議に依つてイタリアに對して經濟制裁を加へた。之に加らなかつた國はドイツ、エステルライヒ、日本、ブラジルの四ヶ國で、アメリカは加はるが如く加らざるが如き態度であつた。この結果は到頭何にもならなかつた。英國の議會で糾彈の聲が囂々と放たれたのに對し、時の首相ボールドウィン氏は流石に苦勞人で「アレは實は一つの實驗に過ぎない。今までアンな事をやつたことがないから、果してアレで侵略行動を止め得る効能ありや否やを實驗して見たのだが、やつて見ると矢張り武力で徹底的にやるのでなければ効果がないと云ふことが判つた。諸君も同感であらう」と、アツサリ鋭鋒を^かした。所謂經濟制裁とはアンなものです。

あの場合五十何ヶ國も居つて、いくさまでしてやらうといふ國はなかつた。英國のみがソコまで奮發しても詰まらぬし、また恐らく國論も纏らぬと思ふからやめた。要するに經濟制裁と云ふものは武力をもつてしなければ効の無いものです。ソんな事は既に五六年も前から方々で言つて居る。聯盟脱退の時も、經濟制裁を喰ひはしないかと臆病者共が言ふから「コツチが頼んだつて向ふ様がソんな事はしてくれない。經濟制裁は武力の發動を要する。その武力の發動の出来る英米ならばコンな面倒臭い事はしないで、イキなり小笠原島あたりへ艦隊を持つて來て、サーおとなしく滿洲から退きなさい」と、來るに相違なう」と言つたので、之と同時に武力運用の一步手前の所まで自國の國論を波立たせず、武力には無論訴へないで、而して對手國を或る程度までいぢめ、或は對手國の國論を或る程度まで軟化し攪亂するだけの經濟上の皮肉手段は、日本は今日已に立派に英米

から喰つて居るぢやないかと茲で申したい。世の外交論者の多數は、武力關係や、經濟的事實を無視して、空虚なる概念の上に、外交論をするから、とんでもない議論が眞面目臭つて出て來るのです。

例へば昨年何月でしたか、之は向ふの新聞にもコッチの新聞にも出て居る。

アメリカの國務卿が、國內の輸出業者に向つて『日本は徹底的に爲替管理をやつてゐるのだから、今後、日本に對する輸出商談は、現金若しくは國際通用力ある信用狀と引換へでなければ商談を進めない方が宜からう。サウ云ふ注意をせずして輕々しくやつた結果、代金を金で受取れないで損失があつても、大使館も領事も面倒を見てやる譯には參らぬぞ』と一般的に告諭した。日本が爲替管理を強化して居るから金は取れぬぞと云ふ理由で輸出を壓縮して居る。また日本の方々に、東京附近にも日米合辦の會社などがありますが、恐らく増資をして見てもアメ

リカ側の株主は拂込をしないに相違なし。

もう一つは、是亦アメリカ國務卿は、昨年の秋であつたと思ふが、侵略國たる日本に對しては、軍用機は勿論、民間航空機と雖も、否その部分品たりとも、今後は輸出してくれるなど、國內の飛行機製造業者に諭告した。何とか云ふ會社だけはグズ／＼言つて居つたが、之も遂に、同業者の批難や政府の壓迫に依り、國務卿の言ふ通りになつた。又日本にあるフォード工場の如きは仕事をワインドアップして引揚げの準備をして居る。今日ポロ自動車一臺と雖もアメリカの技術及び金力により、日本の産業力即ち言ひ換へれば日本の戦力を増加する虞あるものは、米國は公然の立法手續に依らずとも、當業者に對する政府の壓迫によつてグズ／＼抑へ付けて居る。だから向ふは武力使用に至らず、國論の反對を招かず、行政官の手心で出來る限りの壓迫は之を我に加へて居る。この上、おとなしくし

て居れば、もつと露骨に來るだけだ、現に上院外交委員長ピットマンの如きは、日本に對して一切の輸出を止めようぢやないかと言つて居る。

一八、中央指導層の責任

私は、既往は敢て咎めない。お互に人間だから過ちもある、前非を後悔せよとは言はないが、イツまでも長期戦々々と調子に乗つて、執るべき手段を執らずに居るべきではなからう。英國に『手袋を嵌めて決闘をする』と云ふ言葉があるが、日本の手袋は少し厚過ぎる。速かに此の手袋を脱却すべし、即ち宜しく交戦權を全面的に發動せよ。さすれば、海上方面では、現在の有名無實にして、徒に海軍將士をして、不愉快と退屈を感ぜしめるのみならず、支那人からは馬鹿にされて居るあの沿岸封鎖が、本當のエフエクティブ・ブロックードになり、あの封

鎖線に入るものは勿論、入らむとした一事を以て其の船を捕獲し得る。之は國際法上當然の事だ。日露戦争の時も大分サウした船を捕獲して居る。

ソんなことをしたら此の上なほ英米にいぢめられはしませんかと云ふ者があ
る。何を意氣地のないことを云ふのだと申したい。スペインのフランコ政府でさ
へ、あの英佛艦隊の面前で、敵方へ禁制品や食糧を持つて行く船を、どんく撃
沈して居るではないか、ソレに對して、英國の地中海艦隊、何も爲す能はず、フ
ランス固より涙を呑んで見て居る。此の時に方り、スエズ以東、西太平洋に互つ
て、完全に制壓して居る帝國海軍を持ちながら、何を弱いことを言つて居るので
あるか。

我々が浮氣でやつて居る對支交戦ではない。帝國の興亡に關することだ。

一體いつま

で手袋を嵌め、手足を縛つて、いゝさをする積りか、之は
はれても、
何と申譯があるか。我々は浮氣の沙汰で子弟を百何度の熱
砂の中に戦はせて居るのではない。北は外蒙の境から、南は宋が最後を告げたあ
の海南島まで、百萬を突破する忠勇義烈の我が軍は働いて居るし、ソレ丈けの國
家の生産力を支那に持つて行つて居るのではないか。初めから交戦權を發動して
居れば、少くとも南京陥落後、或は廣東攻略後アタリには疾づくに濟んで

地方人は實に眞剣に、同時に 非常な感激
と自己犠牲に於て、戦線に子弟父兄を送り、銃後の護りに邁進して居る。ソコに

(三行半削除)

中央から國費で精神總動員の辯士なるものがやつて来る。地方の人々は狩り立て
られてソレを聴きに行く。サウするとその辯士が、お前達はもつと緊張しなくち
やいかぬなどと、全く平然としてやうなことを言ふ。國家として

精神總動員の中樞の機構に
忠勇な國民を
が入つて居るに至つては、我々

。舉國一致だからソんなことを言ふなどと或
る老人が私に言つたこともあるが、舉國一致とは味噌も糞も一緒にするの謂ひで
はなす。一方では

之もよろしい。しかし之と同時に他方では國體破壊のマルキシスト、階級戦の

現前の時局と我が外交對策

士として名を爲した連中を
は教へてやらうと云ふ。

我我

一九 大詔御煥發を奏請すべし

コウいふ狀況に鑑み、速に國民心理の眞劍味を現すためにも、要すれば、宣戦の大詔御煥發を願はなければならぬ。則ち、恐れ多い話であるが、政府は宜しく今日まで疾く、宣戦の御詔勅御降下を願ふべきでありましたが、と申上げて、大詔御煥發をお願いすべし。法律上の議論としては宣戦の御布告は交戦權發動には其の必要がないのですが、精神的影響を考へますと、國民をしてウンと緊張させるために、宣戦の大詔は御煥發をお願いするに越したことはないと思ひます。

ドゥしても戦争遂行を蒋介石潰滅の一途に置いて、人間の頭と力で及ぼし得る限りの一切の正常なる手段を盡さなければならぬ。ソレがためには、最早交戦權の發動を遠慮せずやるよりほかに策はない。佛領印度支那沿岸からベンガル灣方面へかけ假裝巡洋艦の相當數も出して置けば、所謂ビルマ、ルートや、所謂ハノイ、ルート向けの武器彈藥は悉く押へてしまふことが出来る。この一舉以つて蒋介石を氣死せしむるに足る。之はドゥしても一國の識者の聲として、速に政府を鞭撻して、この眞劍なる戦争の效果的遂行の唯一の方法である交戦權發動を促し、之がため要すれば、甚だ恐れ多い話だけれども、陛下の大詔御煥發をお願いすることを敢てしても、是非とも此の際、

して戴きた

5。

講和工作に付ても色々話を聞くが、講和工作では戦争は延長するのみです。お

現前の時局と我が外交対策

互に、「ハハアあいつはモウ參つて來たな、モウ一息だ頑張れ」と云ふことにな
 る。世界大戰の時に、一九一五年即ち大正四年の暮から七年頃までは、スキスを
 舞臺とする所謂講和工作が、英佛側と獨逸側との間に、殆んど公々然と行はれて
 居つた。その結果は戦争を四年何ヶ月に長期化した。結局、本當に獨逸に對し海
 上封鎖を完行し、就中オランダ及びスカンヂナヴィヤ三國の物資輸入を徹底的聯
 合側の統制下に置いて、ドイツに物が行かぬやうになし得たのと、それから米國
 參戰の結果、米國から一年掛つて二百何萬の兵が來てその内の數十萬は佛國戰場
 に現はれたのと、英米佛の無數のタンクが戰場に馳驅し來つたのと、此の三つの
 事情即ち純然たる武力の活躍に依りてのみ戦争が終局したのだ。スキスに於て或
 はストツクホルムに於て行はれた講和工作は徒に戦争を長引かせたのみで、何の
 効果もなかつた。

我々は何も知らないが、假に日本の政府が、一方に軍事的行動を執ると同時
 に、他方に政治的或は所謂謀略手段で講和工作を若しやつてゐるとしても、私は
 決して政府の精神や動機を非難はしない。併し問題は、それが効果ありや否やの
 點にある。また過去を咎める譯ではないが、對支處理方針、所謂講和條件を確乎
 不動のものだと政府は頻に言ふが、奉天戰後、ルーズヴェルトから小村侯爵に、
 『此際日本の方にも講和意志ありと云ふことを然るべき方法でロシアに判らせ、出
 來れば講和條件でもロシアにお示しになつてはどうか、之は自分の思ひ付の儘だ
 がお考を煩す』と言つたところが、小村侯爵は即座にコウ答へられた。「ロシアに
 平和の氣運は動いて居るだらうが、御承知の通りロシアには武斷派と文治派があ
 る。文治派は初めから、戦争反對だから、文治派が平和を欲するのは當り前だが、
 ソレは何の價値もない。武斷派が本當に平和を切望すると云ふならば考へて見て

も可いが、然し自分の見るところでは、武断派はモウこの戦争は勝味がないと判つて居ても、戦争を始めた責任が自分達にあるのだから、愈々講和と云ふ時は自分共は没落の時だと云ふので、自衛上、戦争を断じてやめやうと言はないのみか、長期戦に行かうと固執する。換言すれば武断派が悲鳴を擧げなければ到底講和なぞ出来るものでない。然るにサウした事情の今日假にも日本側から講和の意志ありと云ふやうなことを言出しては、却つて戦争繼續の決意を固めさせて戦争は長くなる一方だ』と言はれたのである。今日の蔣政権は丁度それと同じ立場にある。今や日本は此の小村さんの言を味ふべきのではないかと思ふ。(拍手)

二〇、戦時外交の常道

小村侯爵は又、右のルーズベルト大統領への回答に於て、「講和條件なるものは戦争の進行如何に依るものであつて、之が講和條件で御座ると前以て今言へるものではない」と仰つしやつたのです。

況んや向ふが望みもせず、我方が負けもしないのに、講和條件は確乎不動で御座るなど、云ふことは戦時外交には断じてあるべきことではない。戦時外交に確乎不動の手があると言ふのは、北京の萬壽山の湖水に浮べた石の船に乗つて、之でロンドンまで行くのだと言つて居るのと同じだ。コウいふ戦時外交のやり方は嘗つて見たことがない。論より證據、

の外交談判など、まるで木曾義仲が栗津の泥田に馬を乗り

入れて抜きも差しもならぬ状況である。又所謂對歐洲情勢問題についても大分ゴタクして居つて

から、一つ條約を、事務的には此の程度が可からうと

、條約はこんな風に拵へるべきものだ、致へて上げる積りである。論文に結論を着けたのですが

一方アドヴァンタイザーあたりを見ると、日本は露伊との同盟はやらぬのだ。所謂防共協定を一步も出て居ないと見て居る。ソレは英國の海軍力と經濟封鎖が怖いからだと言ふ事立てゝある。しかし

大國民は、ムッソリニの文句ではないが、真直に行かなければいけない。左顧右眄、ヒットラーやムッソリニの御機嫌も取りたし、英米にも好く思はれたし例の筋から何か言つて來て居る。そして肝腎要の國際法に依る交戦權は土藏の中にしまて居る。國民は戰時體制、外國人は勝手放題、之で一體どうなりますか。

大阪の事件に於いて、事件、續いて大森と品川の等々に關係し

ク云ふ事を想起したい。即ち之は決して偶然の、世界戦争の上半季

米國參戰以前、米國の各工場は英佛の爲に盛んに軍需品を造つて居た。ソコでドイツは非常に大規模なサボタージユを謀つた。

ストライキの煽動、機械の破壊、工場の爆破、頻々として相次

いで、その結果米國政府も夢が醒めて、丁度最近トルコ大使になつた、ヒットラ

現前の時局と我が外交對策

一のすぐ以前の總理大臣たりしフォン・バーベン、當時はワシントン大使館附武官のキャプテン・フォン・バーベン、之を放逐したものです。今や日支戦争に於て日本を敗者の地位に落さうと云ふ、ソレこそ確乎不動の方針に基いて我に對して居るが、世界戦争中にアメリカがドイツにやられた工場破壊といふ手、あの體驗の記憶を今日喚起しないと誰が、保證し得るか、今日在留支那人に對しては、

ふ。之では大手を振つて

などを幾らで

も。此の頻々たる

尋常の警察事故視するべきも

のでは決してないと思ふものでもあります。之も亦、日本が戦争をして居ると云ふ冷厳なる事實に
 忘れて居るからでありま
 す。以上を以つてお話しを終わります、どうか御共鳴を願ひます。

<p>昭和十四年八月十七日印 昭和十四年八月二十一日發</p> <p>期 行 「歐洲情勢と支那事變」 定價一圓六十錢</p>	<p>著者 本多熊太郎 發行者 千倉 豊 東京市京橋區京橋三ノ一</p> <p>印刷者 堀内文治郎 東京市神田區三崎町三ノ三</p>	<p>發行所 東京・京橋 第一相互館 千倉書房</p> <p>電話 (56) 九三三 八二二 八八七 東京 九七八</p>
<p>郵内印刷所整版印刷</p>		

二八五

☆ 著 名 郎 太 熊 多 本 ☆

魂の外交

——日露戦争に於ける小村侯——

一國の興亡は外交の強弱剛柔にかゝつてゐる。熱のない外交によつて、如何に世界の國々はその姿をかへたか。魂を以つて己の外交に投入した、この偉大なる小村侯の足跡こそ、現下の飛躍期に對處する國民への規範であらう。著者は親しく小村侯に親交した外交界の元老。

四六判三七二頁
價 一圓六十錢
送料十四錢

先人を語る

先哲の言行こそ永遠に輝きわたる眞理のシンボルだ。我外交界の重鎮たる著者は、茲に人生行旅の如しとせば、其の過往に遺棄する巨人傑士は夫れ猶ほ名山大川の如き歌と冒頭して、その半生に親交せる天下の巨材——山縣、伊藤、松方、桂、山本、寺内、後藤、原、小村侯等々の大先輩を追憶し、その感容を語る。その片言は無限の示唆と教訓を與へ、筆語よく偉人の眞骨頂を躍如たらしむ。而も、諸般の國運發展途上に於ける跡々たる足跡こそ、今や時局多端にして偉材を思ふ時、轉た感慨の深きものがある。特に本書の壓巻は、小村・ウキツテのポーツマス談判筆記にして、門外不出の絶品、實に我が外交史を飾る一大偉觀である。

四六判二八八頁
價 一圓六十錢
送料十四錢

大元駐獨 使 本多熊太郎著

日支事變外交觀

四六判四三六頁
定價一圓八十錢
送料十四錢

事變をめぐり國際關係を分析して、我が外交の方途を指示せる名著！

本書は、日支事變の因つて起れる國際情勢と將來の動向を明かにせる並々の主張にして、卷頭西安事件を解剖して英蘇兩國の抗日政策の本質を検討し、既にして蘆溝橋事件の勃發するや日支全面的衝突の不可避を豫斷し、速にその對策を樹立すべきを論じ、南京陥落の以前に於て抗日將政權の咽喉部たる廣東政略の絶對必要なる所以を力説して對英強硬外交の急務を警告せる識見の高邁は、識者の驚異とする處にして、現實の世界情勢の正確なる認識による、祖國の正義と權威に對する、對外政策に一貫せる著者の經綸と熱情とは、何人をも感動せしめずにはおかない。事變を論じて現實の歴史過程を明かにせる眞に劃期的文獻たるべき名著である。

著名湖秀柳白

【版定】

民族日本歴史

日本人の世界観と、
人生観を創造する、
不朽の國史出づ！！

民族日本歴史は、從來の淺薄かつ抽象的また保守的なる凡ての日本歴史書に變革を興へ、後代の世界史にわが日本生成の大指針を悉く雄大な意圖を以て描かれた、全く新しい國民の歴史である。

定價各冊
一圓七十錢
送料十四錢

!!刷増大評好冊各

建國編
王朝編
封建編
戰國編
近世編

【成完】

明治大正國民史

日本は何處より何處へ行く！
此の唯一の指標・現代日本生成の秘鍵・渴望の明治大正史いづ！

明治大正國民史は、我が新興史學唯一の確立者たる著者の、偉大なる修史精進の所産だ。又本史こそ、實に明治に生れ大正に育ち、偉大なる現代日本の擔當者たる著者が長年月間構畫せる自己認識の案内書であり、又現代日本再評價の正しき指導者だ。著者對幕の側面のみと、或は物質發展の側面のみから語らんとせる維新史の常識を打破して、日本民族の進歩力・開拓力・創造力の積極性を抽出したる本編こそ近來の大收獲である。

(明治初編)
(明治中編)
(明治終編)
(大正概編)

定價一圓七十錢
送料十四錢

東第 京一 橋 房 倉 千 替 振 東 八 七 九

思想・社會・政治・哲學

著者	書名	定價	著者	書名	定價
美濃都建吉著	行政裁判法	二・八〇	小池四郎著	社會主義か資本主義か	一・〇〇
小泉信三著	マルクシズムとボルシエヴズム	二・八〇	白柳秀湖著	社會展開の動力	一・〇〇
河合榮治郎著	英國労働黨のイデオロギ	一・〇〇	後藤朝太郎著	哲人支那	一・〇〇
水上鐵治郎著	英國の労働組合	一・〇〇	帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	一・〇〇
平林初之輔著	近世社會思想講話	一・〇〇	白柳秀湖著	アメリカを裸體にする	一・〇〇
永井亨著	社會の講話	一・〇〇	佐々弘雄著	食慾と愛慾	一・〇〇
山川均著	社會主義の講話	一・〇〇	都新聞編輯部編	政治の貧困	一・〇〇
土田杏村著	文明は何處へ行く	一・〇〇	山川均著	法律相談	一・〇〇
末弘嚴太郎編	農林法規集	三・〇〇	山田均著	無産政黨の講話	一・〇〇
野間海造編	英國労働黨の組織・沿革・政策	三・〇〇	土田杏村著	現代世相論	一・〇〇
藤井佛著	國家論	二・〇〇	尾崎大佐著	米國海軍戰略	二・〇〇
山川均著	労働組合の講話	一・〇〇	安部磯雄著	産業率還論	一・〇〇

尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	一・三〇	白柳秀樹著	歴史と人間	一・三〇
喜多壯一郎著	ジャーナリズムの理論現象	一・三〇	工藤直太郎著	藝術と人間	一・三〇
清澤潤著	非常日本への直言	一・三〇	本莊可宗著	自由観の革命	一・三〇
室伏高信著	現代文明講話	一・三〇	清澤潤著	時代・生活・思想	一・三〇
具島兼三郎著	フアツシスト國家論	一・三〇	室伏高信著	戦争と平和	一・三〇
上野閑一著	能率文明論	一・三〇	具島兼三郎著	ナチス專政時國家体制	一・三〇
茂木惣兵衛著	來るべき世界の姿	一・三〇	中河與一著	萬葉の精神	一・三〇
坂口二郎著	現代新聞論	一・三〇	藤野金政著	ソヴェト滞在記	一・三〇
中野正剛著	國家改造計畫綱領	一・三〇	河田嗣郎著	日本社會政策	一・三〇
鈴木梅四郎著	立憲哲人政治	一・三〇	室伏高信著	大英帝國主義批判	一・三〇
藤野金政著	ソヴェニット・ロシア 今日の生活	一・三〇			
清澤潤著	現代日本論	一・三〇			
清澤潤著	世界再分割時代	一・三〇			
本莊可宗著	哲學と人間	一・三〇			

Q-141

IPS Doc # 3237

SHIPPING ADVICE #

BOX #

ITEM # 259

✓

IPS#3237

SHIPPING ADDRESS # 10125

Box 6

ITEM # 159